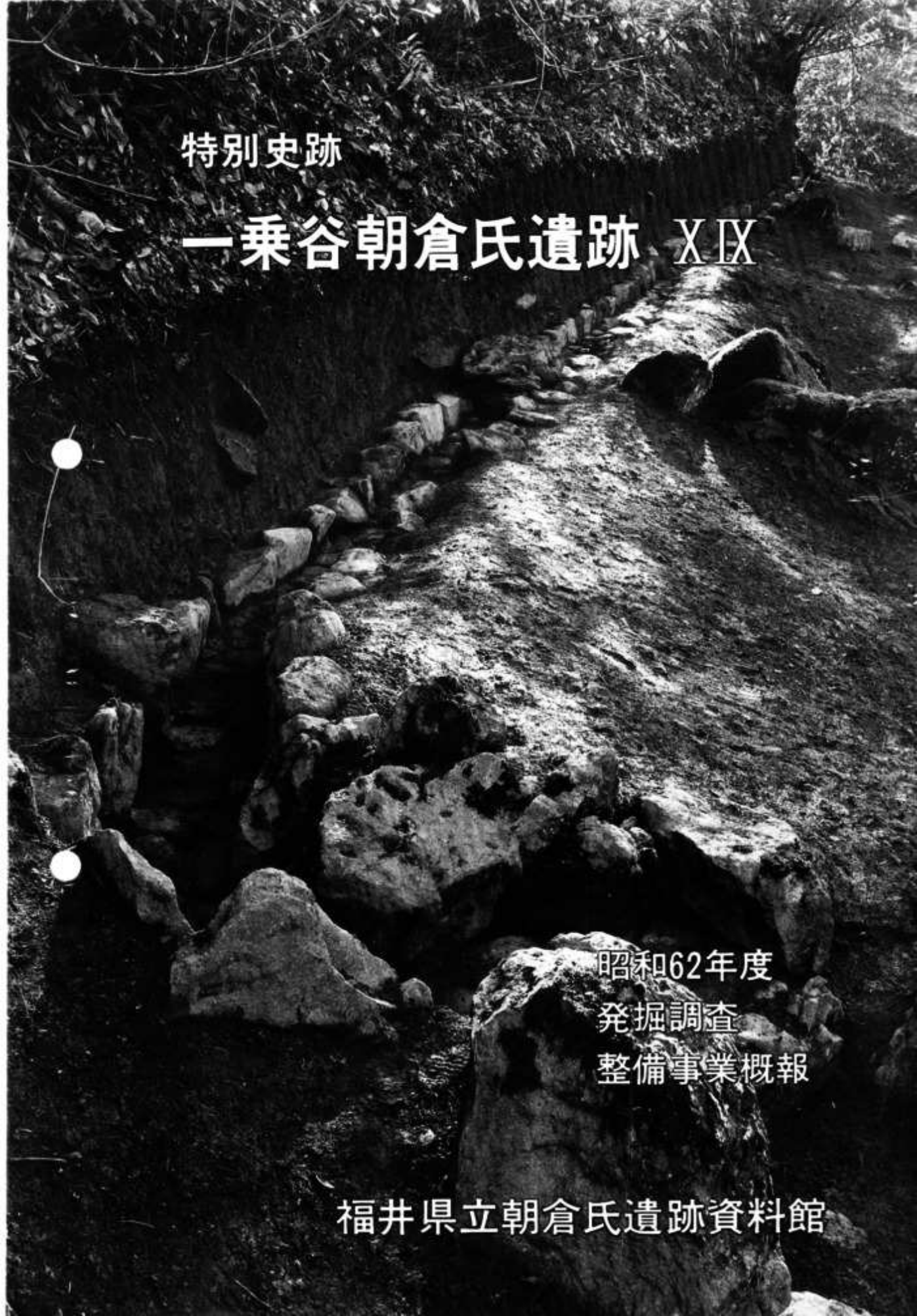


特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡 XIX

昭和62年度
発掘調査
整備事業概報

福井県立朝倉氏遺跡資料館

はじめに

本年度は、朝倉氏遺跡の発掘、整備事業第５次５箇年計画の初年度にあたりますが、発掘調査はまず義景館前の仮駐車場移設に伴い、新設予定地の事前調査を行いました。

発掘調査地の川合殿地係は、江戸末期に描かれた一乗谷古絵図には、朝倉氏の有力家臣である「河合安芸守」と記されているところです。遺構の残存状況は、全体によくありませんでしたが、重臣屋敷にふさわしく小庭園を持った、かなり規模の大きい武家屋敷が山側に発掘されました。また武家屋敷の東側には、町屋跡もいくつか確認されました。なお武家屋敷内の井戸底からは、慌てて隠匿したと思われる大量の備蓄銭が出土し、一乗谷焼亡直前の混乱状態が想像されたのであります。

湯殿跡庭園、諏訪館跡庭園は、すでに昭和42年に発掘整備されていますが、不明であった導水路と排水路について今回調査いたしました。遺存状況はよくありませんでしたが、予想どおり導水路と排水路の一部を検出することができました。谷川から清水を引いて、滝口から流下させるならば、なお一層豪壮華麗な、本来の庭園の姿をみることができるでしょう。

環境整備では、昨年度発掘した「鰐渕将監」屋敷と伝えられる武家屋敷跡を、これまでと同じように平面的に保存整備しました。重臣や中、下級武士の屋敷から町屋跡まで整然と並ぶこの地区の整備は、一応これで完了することになります。

下城戸は、城戸の内側の土塁と広場を整備しました。崩れ落ちていた巨石は発掘調査・資料などを参考に元にもどして、壮大な城戸口の石垣を復原しました。なお昨年に引き続き、西側山裾の園路の造成も行っています。

おわりになりましたが、事業の実施にあたり、種々ご指導、ご援助をいただきました文化庁、朝倉氏遺跡調査研究協議会、福井市教育委員会などの関係各位、中村石材工業株式会社ならびに城戸ノ内町をはじめとする地元の皆様に心から感謝申し上げる次第です。

昭和63年３月

朝倉氏遺跡資料館長　　藤原武二

目　　次

はじめに

第57次調査

発掘された遺構……（吉岡泰英）　1

発掘された遺物……（月輪　泰）　4

第58次調査

発掘された遺構……（岩田　隆）　8

発掘された遺物……（　〃　）　11

第60次調査

諏訪館跡・湯殿跡庭園導水路の調査……（水野和雄）　14

環境整備

第54・56次調査地区整備工……（吉岡泰英）　15

ＰＬ．1　カラー写真

ＰＬ．2～6　第57次調査・遺構

ＰＬ．7～11　第57次調査・遺物

ＰＬ．12～15　第58次調査・遺構

ＰＬ．16～17　第58次調査・遺物

ＰＬ．18～19　第60次調査・遺構、遺物

ＰＬ．20～22　第54次調査地区整備工

ＰＬ．23～27　第56次調査地区整備工

第1図　発掘調査・環境整備位置図

第2図　第57・58次調査遺構全測図

第3図　第57次調査・遺構

第4～9図　第57次調査・遺物

第10～12図　第58次調査・遺構

第13～14図　第58次調査・遺物

第15図　第54次調査地区整備工全体図

第16図　第56次調査地区整備工全体図

第 57 次 調 査

この調査は、福井市城戸ノ内町字川合殿地係約2,560㎡を対象としたものである。ここは、南北方向の道路を中心に比較的規模の大きな武家屋敷が整然と配されている平井地区の南に位置し、また字名「川合殿」から、朝倉氏の有力家臣「河合安芸守」に関係する屋敷が存在したのではないかと考えられている。今回の調査は、新県道開通等に伴い、旧県道の一部が廃されることとなり、これに面して当主の住した朝倉館前に仮設されている駐車場を移転し、朝倉館や諏訪館庭園等の遺跡中枢部と、復元武家屋敷等の武家屋敷群を中心とする整然とした町並が約14,130㎡にわたり面的に整備されている平井地区に隣接し、新県道にも面するこの地に、見学者のための駐車スペースを設ける計画となったことに伴う調査である。

調査は、昭和62年４月１日に開始し、同年６月30日に基本的な発掘を終え、北に隣接する次の第58次調査へ移った。また、同年11月10日には、第58次・第59次調査区と合せヘリコプターによる空中写真測量を実施し、平面実測図を得た。現在は、遺物整理等の室内作業を進めているが、ここでは、この調査の概要について報告する。

発掘された遺構（ＰＬ．２～６、第１～３図）

調査の対象となった場所は、一乗谷川の西岸の山裾から続く東西約45ｍ、南北約46ｍの大きな区画と、これの東の県道との間の幅約10ｍ程の一段低い区画であって、これらの区画はさらに細分化され水田となっている。なお、県道の改良に伴い、東の県道脇は一部すでに調査されている。

発掘調査の結果をみてみると、全体に削平を受けた所が多く建物跡等はほとんど残らず、検出された遺構は、井戸や石積施設等、下方へ掘り込まれたものが大半であって、遺存度は良好とはいえない。しかし、これらの遺構や土塁・石列等から屋敷割の概略は伺われる。

検出した主な遺構は、土塁１、石列４、溝６、庭園１、礎石建物５、井戸６、石積施設11等である。これらの遺構の大半は、朝倉氏滅亡時に存在したものと考えられるが、一部これに先行するものも検出されており、また、深掘りトレンチ等から、大きくは３回の改造があったのではないかと考えられる。

以下、これらの遺構の内、主要なものについて述べることとする。なお、ここで用いる方位は、通例に従い、谷地形を重視し、谷の入口を北、奥を南としており、これは、地図上の方位とは北で西へ約26°振れている。

ＳＡ3411　調査区の北端に位置する東西方向の土塁である。幅は約２ｍと考えられるが、屋敷の内側となる南面の石列は一部であって不明な点もある。北面石垣は基底部は比較的良く残り、

この土塁を境にして北の屋敷は約0.5ｍ低くなっている。北面石垣は径0.3～0.5ｍ程の自然石を２～３段積んでいたようである。また、西の山寄で、北へ約１ｍ張り出していたようである。なお、この土塁の北約２ｍに水田時の石垣があって、この間は、土塁石垣を壊した土石で埋められていた。

ＳＶ3412　先の土塁ＳＡ3411の東端から南へ延びる南北方向の石列である。東に面を持ち、これを境に0.2～0.3ｍ段差がついている。また、この石列に接して東に石積施設ＳＦ3424が存在している。こうした点から、基本的な屋敷境界となる遺構と考えられる。

ＳＶ3413　南北方向の石列であって、先の南北方向の石列ＳＶ3412と約3.9ｍの距離をおいて西に平行している。西に面を持っており、また、東西方向の溝ＳＤ3432を越えた南に位置する幅約1.5ｍの東西に面を持つ遺構ＳＸ3447の西の石列は、この石列の延長上であり、また、東の石列ＳＶ3412との間にも所々ＳＸ3447の東の石列とほぼ幅を同じとする石が存在し、この約1.5ｍ幅は土塁であり、その東の幅約2.4ｍは通路であった可能性が考えられている。

ＳＶ3414・3415　共に東西方向の石列である。南北いずれが面であるのか判然としない。北に位置する石列ＳＶ3414は、平行する東西方向の溝ＳＤ3432との間は約1.8ｍであって、この間が通路となっていたとも考えられる。また、南の石列ＳＶ3415は、この東西方向の溝ＳＤ3432から７ｍ程南に位置している。

ＳＤ3432　東西方向の石組溝であって、側石はかなり取り去られているが、幅0.3ｍ、深さ0.2ｍ程と考えられる。西で北へ折れＳＤ3434となっているが、この溝の延長上にはさらに東西の石列的な遺構ＳＸ3457も存在しており、屋敷を大きく南北に分ける遺構である。また、この溝の北約1.5ｍに平行する溝ＳＤ3433があって、この間も通路であった可能性が考えられる。

ＳＧ3443　発掘区西南部で検出された庭である。２時期にわたっている。当初は、３つの石と池から構成されており、後に、この池を廃している。北に建物が存在しており、これに面した南庭であったようである。石組は、中央に径約２ｍの大きな石を配し、左右に径１ｍ程の偏平な石を１石ずつ配している。中央の大石は上部が割られているが、少し立ち上っていたようである。また、向って左の石の前、池の南東端に接して、径0.1ｍ程の偏平な玉石を敷き並べている。池の周囲には径0.2ｍ程の小振の石を立てて並べている。建物に面した北の汀線は、直線的であって、全体的にも単純な形を呈している。池の底と側石の目地には粘土を張り付けており、水が存在したと思われるが、いずれから引き込まれたのか明らかでない。しかし、東南の玉石敷のあたりが側が低く、ここから排水されたと考えられる。また、側石は、北半のみ残るが、粘土の立ち上り等に側石の痕も残り、全体に側石が存在したと思われる。この池を廃し、全体を平らにし、石組を生かし、全体に径３～４㎝程の白砂を敷いたのが後期の庭である。この時にも玉石敷は露出していた可能性もある。また、この庭の西南部にも径10～20㎝程の玉砂利が多く、一部に庭石的な伏石もみられることから、西の山裾へ向って庭は拡がりを持ってい

た可能性が強い。

ＳＢ3440～3442　西南隅部の礎石建物である。ＳＢ3440は一部の検出であるが、偏平な径0.3m程の石は連続して配しており、土台を用いた建物と考えられる。ＳＢ3441は南北の礎石列の一部を残す。柱間は約1.9ｍ程である。ＳＢ3442は東西の礎石列の一部を残す。池の埋土上に礎石が据えられており、後期の庭に伴う建物であろう。これに対し、ＳＢ3441は前期の庭に伴うものと考えられる。

ＳＥ3416～3421　石積の井戸である。すべての井戸を底まで掘り下げた。ＳＥ3416は、深さ約3.2mであって、上部へ向って径を少し小さくするせり出しがみられ、天端で径は約1.2mである。この井戸の上部に据えられていた笏谷石製の井戸枠がほぼ完形で出土した。ＳＥ3417は、深さ約2.7ｍであって、上部へのせり出しはほとんどみられない。この井戸の底には、杉板を組んだ井枠を設けていた。ＳＥ3418は、深さ約4ｍであって、丸太を井桁に組んだ上に石を積み上げている。上部へのせり出しがみられる。天端を欠くが上部の径は約1ｍである。ＳＥ3419は、深さ約3.8mで、上部へのせり出しを持つ。天端石を欠くが、上部の径は約1.1ｍである。この井戸には多量の遺物が投げ込まれており、中でも16,000枚を越す銅銭が注目された。ＳＥ3420は深さ約2.3ｍで上部へのせり出しは持たない。径は約0.9ｍであり、天端石を欠く。ＳＥ3421は、深さ約2.9ｍであって上部へのせり出しを持つ。天端石も良く残り、この径は約0.9ｍである。この井戸は中途で廃されていることが明確である。

ＳＦ1466・1467・3422～3430　方形に石を積む石積施設と通称している遺構である。規模は若干ばらつきがあるものの１ｍ前後のものが多く、また、深さは0.5ｍ程が多い。東部に集中して検出されている。これまでの調査例から、この遺構は屋敷境や土塁脇に存在するものと建物に付属するものの２種類が多いことが知られており、町屋と考えられる小区画では便所と考えられる例も多い。

以上、主要な遺構についてその概略を述べた。最後に、若干のまとめをしておこう。

全体として、後世の水田化時の削平を受けた所が多く、詳細な町割や屋敷内の様子は明らかでない。しかし、全体としての傾向は伺われる。すなわち、西の山裾には土塁を巡らす大規模な屋敷が存在する。この内部をみてみると、南には庭が存在し、北部には井戸や石積施設等の生活のにおいのする遺構が多く、このことから、南を表向、北を内向とする構成が知られる。また、この屋敷の東外方には、井戸や石積施設が集中しており、これまでの調査例から、ここは町屋群であった可能性が高い。このように、この地区の全体的な傾向は伺われるが、西に位置する有力家臣が住したと考えられる屋敷へのアプローチの位置が明確でない等の今後の課題も多く残されている。

発掘された遺物（ＰＬ．７～11、第４～９図）

第57次調査地区で出土した遺物は、総点数76,775を数える。内訳は、表１に示した通りである。表を概観すると、ＳＥ3419から一括出土した銅銭が16,500枚余りと大量であったため、従来になく銅銭の占める割合が大きいのが特徴である。これ以外は、他の調査地とほぼ同様の傾向を示す。

表１　第57次遺物一覧表

器種			点数	%
日本製陶磁器	越前焼	甕	1,263	
		壺	1,063	
		鉢	144	
		擂鉢	835	
		火鉢	11	
		他	3	
		計	3,319	4.32
	土師質	皿	51,678	
		羽釜	84	
		土鈴	34	
		小壺	23	
		芯押え	2	
		他	5	
		計	51,826	67.47
	鉄釉	碗	136	
		皿	9	
		鉢	20	
		壺	73	
		茶入	2	
		他	14	
		計	254	0.33
	灰釉	碗	27	
		皿	117	
		卸皿	3	
		鉢	62	
		壺	21	
		他	7	
		計	237	0.31
	瀬戸・美濃		14	0.02
	瓦質	香炉	4	
		瓦燈	11	
		火鉢	25	
		風炉	14	
		他	23	
		計	77	0.1
	国内陶器		24	0.03
小計			55,751	72.62
中国製陶磁器	青磁	碗	337	
		皿	441	
		鉢	44	
		香炉	35	
		盤	160	
		花生	6	
		他	14	
		計	1,037	1.35
	白磁	碗	23	
		皿	885	
		坏	39	
		壺	4	
		他	2	
		計	953	1.24
	染付	碗	129	
		皿	275	
		坏	7	
		他	5	
		計	416	0.54
	赤絵		5	0.01
	黒釉	碗	2	
		壺	18	
		計	20	0.03
	褐釉	壺	12	
		茶入	1	
		計	13	0.02
	計		2,444	3.18

器種		点数	%
朝鮮	碗	9	
	壺	3	
	他	14	
	計	26	0.03
ベトナム交趾三彩		29	0.04
近世・その他		153	0.2
小計		2,652	3.45
金属	銅銭	17,095	
	釘	253	
	刀子	4	
	棟瓦	5	
	小札	3	
	銅碗	2	
	鈴	3	
	履輪	2	
	鉄鏃	3	
	鉄鍋	1	
	蓋	1	
	茶釜	1	
	取手	1	
	針金	2	
	装飾金具	5	
	他	93	
	計	17,474	22.76
石製品	硯	51	
	パンドコ	291	
	風炉	19	
	臼	8	
	盤	36	
	井戸枠	7	
	砥石	7	
	玉石	142	
	板石	1	
	他	256	
	計	818	1.07
木製品	漆皿	1	
	漆片	8	
	櫛	3	
	楠	1	
	曲物	1	
	井戸組板材	1	
	他	26	
	計	41	0.05
その他	壁土	14	
	布片	2	
	藁縄	1	
	骨片	11	
	種子	3	
	他	8	
	計	39	0.05
合計		76,775	100

調査区全体に削平を受けているため、明かに遺物を伴う遺構は、井戸・石積施設のみであった。ＳＥ3419では、銅銭のほかにもまとまった資料が出土した。今回の報告では、まずこれを取り上げ、次にその他の遺物について述べたい。

ＳＥ3419出土遺物

ＳＥ3419から出土した遺物は、19,454点を数える。このうち16,594点は銅銭が占めている。これを除けば、やはり土師質皿が多く、2,008点を数える。茶器関係では、葉茶壺として使用されたと思える、中国製の褐釉四耳壺が２個体分、小型の四耳壺、壺が各１個体分、黒釉の天目茶碗が１個、加えて茶臼等が出土しており、この井戸を特徴づけている。

越前焼　越前焼は、甕・壺・擂鉢が出土した。35点を数える。（１）は、頸がほぼ直立し、口縁を外反させた壺で、胴が大きく張り、卵形を呈する。器高約42.5cm、口径約16.2cm、胴径約42.3cm、底径約15.9cmを測る。肩部に「个丁」のヘラ記号が刻まれる。（２）は、口径約21cmを測る中型の甕である。

土師質土器　皿・小壺・灯芯押え・羽釜が出土した。（３）は、皿の底部を円形に打ち欠き、中央に円孔を穿った灯芯押えである。

瀬戸・美濃焼　鉄釉の碗・鉢、灰釉の皿が出土した。（４）は、鉄釉の碗である。胴が広く開き、内湾気味に口縁に至る。口径約17.6cmを測る。

灰釉皿（５）は、口縁をやや外反させるタイプである。口径約９cmを測る。図示しなかったが、鉄釉碗では、口縁の下にくびれをもつタイプも出土している。

中国製陶磁器　青磁では、碗・皿・盤・鉢等が出土した。

白磁では、皿・坏が出土した。（12）は、いわゆる「口禿皿」である。平坦な底部の縁は、わずかに段がつき、胴は直線的に開く。白濁した乳白色の釉がかかるが、口縁端部ではこれを拭き取る。口径約16.4cmを測る。皿（６）は、胴が畳付きから外反気味に開く。口径約11.8cmを測る。このほか、胴の丸い端反りタイプも出土した。

染付は、碗・皿が出土した。（14）は、いわゆる「饅頭心」の碗である。口縁部内外面、腰部、見込にそれぞれ界線を巡らし、外面胴部には唐草文、見込界線内には、草花文を描く。この草花文は、文様を線描きし、地を塗りつぶす。口径約12cm、器高約6.2cmを測る。（15）は、いわゆる「蓮子碗」である。胴が広く開き、見込は高台内に凹む。口縁部は欠く。腰部と見込に界線を巡らし、外面胴部には唐草文、見込界線内には花弁文が描かれる。（16）は、胴の内湾するＥ群の皿と考える。腰部、高台、見込に二重界線を巡らし、外面胴部に牡丹唐草文、見込には人物の図柄を描く。（17）は同じく広い見込に人物を描いている。

黒釉は、碗（７）が出土した。黒がかった灰色の胎土は砂粒を含み、極小さな気泡が見られるが、堅く焼き締まる。高台は、ヘラで削りだす。胴は直線的に開き、口縁の下に弱いくびれをもつ。口縁端部は尖らず、やや丸みを帯びる。口唇部に覆輪の痕跡が認められる。

褐釉は、四耳壺・壺が出土した。（８・９）は、いわゆる「ルソン壺」と称する四耳壺である。器壁は厚さ約０.５cmと薄いが、焼成は良好で堅く焼き締まっている。肩は張るが、胴部の張り具合から重心が低く、豊満なスタイルを呈する。口縁は、端部を捻りかえし、玉縁状につくる。腰部には、数条の轆轤目がまわっている。肩部のスタンプ銘は認められない。それぞれ器高約41.2cm、約42.7cmを測る。（10）は同じく四耳壺であるが、器高約21.8cmと小振りである。胴径約21.8cmを測り、全体に丸い感じを呈する。薄いつくりで、最も薄い胴部では、厚さ０.３cm足らずである。灰色の胎土は若干砂粒を含むが、堅く焼き締まる。内面胴部以下は、轆轤目が残る。（11）は、器高約22.1cmを測る壺である。肩が張り、胴以下はほぼ直線的にすぼまる。やはり器壁は薄いが、胎土は緻密で堅く焼き締まる。口縁は、断面三角形につくる。内面胴部以下には、轆轤目が残る。灰色の素地に、口縁から肩にかけて茶褐色の釉が薄くかかる。

このほか、赤絵皿（18・19）等が出土した。

その他の陶磁器　（20・21）は交趾三彩の皿である。広い見込をもつ端反りタイプである。全体に下地釉がかけられ、その上に赤・青・緑色を発する三彩釉がかけられる。高台畳付以内にはかからない。火災等の二次的な火炎を受けたためか、釉は若干変色し、荒れている。

金属製品　銅銭は、16,594枚が出土した。同井戸からは、開元通宝、大観通宝、紹聖通宝、不明も各１枚出土しているが、これらは井戸埋土の上層部分から出土しており、井戸底から一括

出土したものとは区別した。一括出土した銅銭には、藁紐が通された例（24）がある。結び目もあり、過去の出土例から、これらの銅銭も97枚前後を一刺（一貫文）にした形のまま放棄されたと考えられる。遺存状況はよいが、なかには流通当時に表面が摩耗し、銭種判読不明の例も数点ある。銭貨名、出土量等は表２に示したとおりである。銭種は80を数える。概観すると、北宋銭が最も多く約82％を占めている。次いで唐銭11.3％、南宋銭3.1％、明銭2.3％となる。銭種別では開元通宝が最も多く、次いで皇宋通宝、元豊通宝、熙寧元宝、元祐通宝が目だっている。量は少ないが、安南銭が10、朝鮮銭が１、琉球銭が２種類含まれる。初鋳造年の最も新しいのは、嘉靖通宝（1527年）である。朝倉氏滅亡が1573年であることと、次に鋳造された明銭が万暦通宝（1574年）であることを考えれば、比較的早い時期に一乗谷に流入してきたと考えられ、当時の貨幣流通状況の一端が窺える。

（105）は、太刀の柄頭に取り付く胄金である。その付属金具（106）も本体に付着したまま

表２　ＳＥ3419出土銅銭一覧表

中　国

No.	銭貨名	初鋳造年	枚数
25	開元通宝	621　唐	1808
26	乾元重宝	758　〃	74
27	乾德元宝	919　前蜀	6
28	漢元通宝	948　後漢	3
29	周元通宝	955　後周	1
30	唐国通宝	959　南唐	8
31	宋通元宝	968　宋	61
32	太平通宝	976　〃	137
33	淳化元宝	990　〃	142
34	至道元宝	995　〃	268
35	咸平元宝	998　〃	366
36	景德元宝	1004　〃	413
37	祥符元宝	1008　〃	775
38	祥符通宝	1008　〃	586
39	天禧通宝	1017　〃	553
40	天聖元宝	1023　〃	780
41	明道元宝	1032　〃	69
42	景祐元宝	1034　〃	274
43	皇宋通宝	1039　〃	1689
44	至和元宝	1054～55〃	158
45	至和通宝	1054～55〃	35
46	嘉祐元宝	1056　〃	137
47	嘉祐通宝	1056　〃	309
48	治平元宝	1064　〃	244
49	治平通宝	1064　〃	35
50	咸雍通宝	1065　〃	1
51	熙寧元宝	1068　〃	1402
52	元豊通宝	1078　〃	1633
53	元祐通宝	1086　〃	1162
54	紹聖元宝	1094　〃	524
55	元符通宝	1098　宋	186
56	聖宋元宝	1101　〃	565
57	大観通宝	1107　〃	248
58	政和通宝	1111　〃	768
59	宣和通宝	1119　〃	91
60	建炎通宝	1127　南宋	3
61	紹興通宝	1131　〃	2
62	紹興元宝	1131　〃	5
63	天盛元宝	1158　西夏	2
64	正隆元宝	1167～78金	54
65	乾道元宝	1165　南宋	1
66	大定通宝	1174　〃	34
67	淳熙元宝	1174　〃	97
68	紹熙元宝	1190　〃	34
69	慶元通宝	1201　〃	38
70	嘉泰通宝	1205　〃	20
71	開禧通宝	1208　〃	23
72	嘉定通宝	1208　〃	83
73	大宋元宝	1225　〃	8
74	紹定通宝	1228　〃	37
75	端平元宝	1234　〃	3
76	嘉熙通宝	1237　〃	14
77	淳祐元宝	1241　〃	36
78	皇宋元宝	1253　〃	24
79	開慶通宝	1259　〃	1
80	景定元宝	1260　〃	26
81	咸淳元宝	1265　〃	30
82	至大通宝	1310　元	3
83	至正通宝	1341　〃	3
84	天定通宝	1359～60〃	1
85	大中通宝	1360　明	13
86	洪武通宝	1368　明	305
87	永樂通宝	1408　〃	48
88	宣德通宝	1426～33〃	5
89	弘治通宝	1488～1503	15
90	嘉靖通宝	1527　〃	1
	小　計		16480

安　南

No.	銭貨名	初鋳造年	枚数
91	大治通宝	1283	1
92	紹豊通宝	1341	1
93	順天元宝	1428	2
94	紹平通宝	1434	7
95	大和通宝	1443～53	6
96	延寧通宝	1453～55	7
97	光順通宝	1470	11
98	洪德通宝	1470	21
99	洪順通宝	1509～15	1
100	玄聴尊宝		1
	小　計		58

朝　鮮

No.	銭貨名	初鋳造年	枚数
101	朝鮮通宝	1423　李朝	22
	小　計		22

琉　球

No.	銭貨名	初鋳造年	枚数
102	大世通宝	1454～60	1
103	世高通宝	1461～69	2
	小　計		3
	不　明		31
	合　計		16594

出土した。(107) は、柏葉の装飾のみられる鞘の責金である。

このほか、刀子、金箔 (108)、覆輪 (109)、針金 (110) 等が出土した。

木製品　小型の曲物 (111) が出土した。径約4.2cmを測る。ほかに漆皿片、板材等が出土した。

石製品　茶臼・硯・バンドコ・井戸枠等が出土した。茶臼は、上臼 (23) と下臼が各1点出土したが、石材が異なるので、セットである可能性は低い。上臼の目は13条単位の8分画である。13条のうち7条は刻みが深く、再刻または追刻の可能性がある。石硯 (22) は、長方硯ＩＢａタイプに分類される。平面形が長方形で、側面はほぼ垂直に立つ。裏面両側には約1cm幅の脚が削り出される。

その他　骨加工品が出土した。(112) は駒石である。(113) は、材の一端に楕円形の孔を穿つ。(114) は、管状の骨材の一端に削り込みを施している。使途は不明である。

(115) は、同心円のタタキ目をもつ須恵器片である。内側にあたる面は、研磨され光沢を放つ。割れ口の一端は平滑に加工されている。使途は不明である。

(116) は布片である。麻と思える生地に、藍染が施されている。皮紐が取り付く。

その他の主な遺物

国内産陶磁器　土師質土器は、皿が圧倒的に多い。遺物量全体の67.3%を占める。(117) は、皿の底部をそのまま円盤状に加工したものである。鉄釉碗 (119) は、口径約8.5cmと小振りで、削り出された高台は、底部を輪高台に削り出す。(121) は、鉄釉匣鉢である。口径約17.2cmを測り、口縁下約4cmに内耳がつく。(126) は、瓦質風炉である。強く張った肩には、2窓を設ける。破片のため確認できないが、2窓の位置関係から3窓の可能性もある。直立する頸部には3個1単位の菱形スタンプが巡る。同じく (127) は、「五七桐」紋のスタンプが巡る。

輸入陶磁器　青磁は、碗 (129)、刻花文盤 (132)、瓶 (133)、植木鉢 (135) 等が出土した。白磁皿 (137) は、円錐形に抉られた高台内に「百内辻」とも読める墨書がみえる。(138) は、軟質の白磁皿である。乳白色の釉がかかり、高台の4箇所を抉り取る。(143) は、胴が直線的に大きく開く朝鮮製のソバ茶碗である。陶器の鉢 (144) は、産地不明である。

金属製品　銅銭は、ＳＥ3419のほかＳＥ3421で241枚、ＳＥ3416で135枚が出土した。(145) は、茶釜の蓋である。(146) は、板状金製品である。断面の一端が折り返されており、何かにかぶせた装飾金具と考える。

木製品　櫛 (148) のほか、桶側板、漆皿、建築部材等が出土した。

石製品　(149) は、風炉である。三足が削り出される。破片のため位置、規模は不明であるが、少なくとも一窓を設ける。石硯 (150) は、長方硯ＩＢｃタイプに分類できる。硯頭縁帯の幅が広い。側面はほぼ垂直に立つがわずかに外傾する。(151～154) は、ＳＥ3416から出土した井戸枠である。いわゆる笏谷石製で、表面の荒れや部分的な欠損が見られるが、4枚ともほぼ完形である。製作過程で引かれた、罫引きの刻線が残る。

第 58 次 調 査

この調査は、第57次調査地区と同じく仮駐車場を設置するための事前調査であって、その北隣約1300㎡について実施した。調査期間は７月13日から８月28日までの約１カ月半である。八地谷より南の地区は、武家屋敷が並んでいたところで、有力武将名が小字名として残っている。58次調査地も字「河合殿」＝「河合安芸守」の一角を占める。

発掘された遺構（ＰＬ．12～15、第１・２、10～12図）

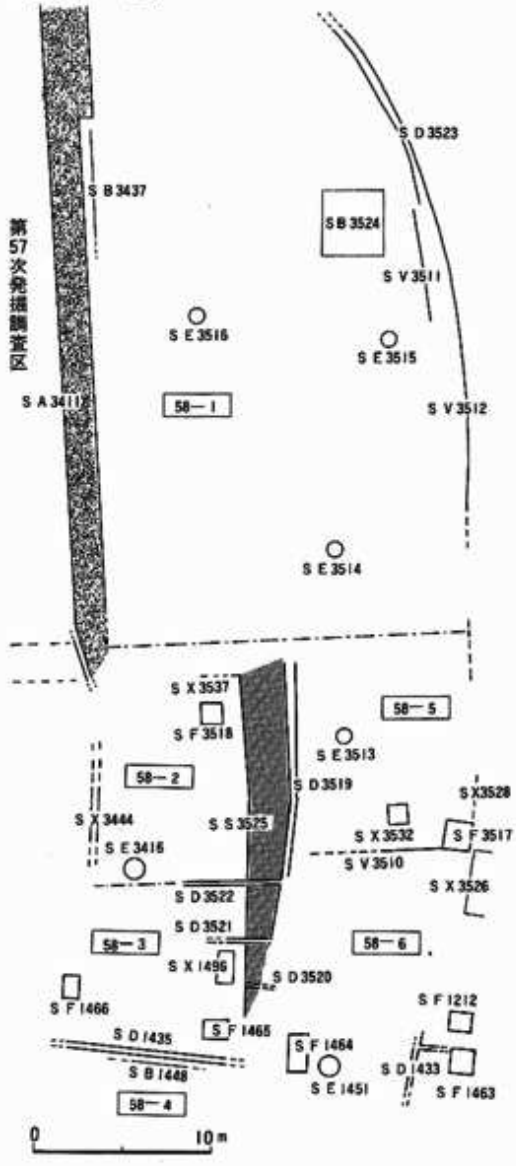
今回の調査地区は、全体に後世の削平が著しく、遺構の残りはあまり良くなかった。遺構全体の構成もわからない点が多いが、山よりに武家屋敷が、一乗谷川よりに小屋敷群（町屋群）が想定できる。以下この観点に沿って各遺構を記述する。なお、第31次調査地区（昭和53年に調査）が今回の調査地区の東に隣接しており、前回の報告（県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書）では全体の位置がわからないため併せて報告する。

武家屋敷について

南北はＳＡ3411とＳＶ3512、西は山によって区画され、東は道路ＳＳ3525の西端（ＳＸ3537付近）までと推定される。面積は約700㎡である。

ＳＡ3411　武家屋敷の南を区画する土塁（これまで土塁と称してきたが、おそらく土塀の基礎であろう。なお、「復元武家屋敷」では、これを土塀の基礎として復元している）で、幅２ｍ、長さ36ｍある。57次調査地区の屋敷に対して約50cm程低くなっており、58次調査地区側だけ石垣の石組が２～３段現存している。土塁西よりの部分で石垣が２重になっている部分があり、改修の跡がみられる。

ＳＶ3512　屋敷の北を限る東西方向の石列で、



挿図１　第57次調査地区略図

後世の用水路の側石として利用されていた為、石列が一部でかなり乱れている。石列の裏側が、溝の面になっていた。石列は、大部分が一段しかないが、東よりのＳＸ3538近くでは一部２段積みが見られる。ＳＶ3512より北側の遺構面とは20～30cmの比高差があり、この石列をもって屋敷の境とみてよい。

ＳＶ3511　内側にＳＶ3512と平行して走る東西方向の石列で、ＳＶ3512より一段高い位置にある。使用している石は、人頭大とやや小振りである。この石列も西よりの部分では、後世の用水路ＳＤ3523につながる。ＳＶ3511とＳＶ3512の間は焼土で整地されており、周辺の整地土（茶褐色土）とは異なっている。

ＳＤ3523　基本的には先述したように、後世の用水路であるが、ＳＶ3511やＳＶ3512の石を並べ変えて用水路とした形跡がある。この水路を境にして両側の整地土が異なっており、屋敷が異なっていたことを推定させる。

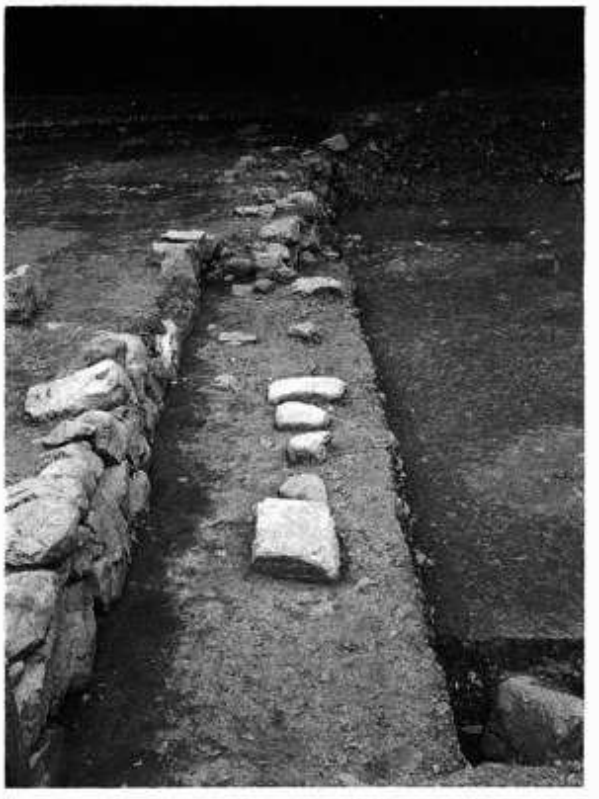
ＳＢ3524　武家屋敷西よりの北辺近くにある東西3.6ｍ、南北3.6ｍの礎石建物である。東側の礎石列がはっきりしないが、礎石も小振りで、建物の規模は、現存している礎石列に限られる。よく残っている北側の礎石列の間隔は、0.6ｍと狭い。建物内には礎石がないが、これはこの規模の建物では最初から存在しなかったとみてよい。西側礎石列の外にＳＢ3524に伴う石列がある。この建物は、焼土で覆われていた。

ＳＢ3437　土塁ＳＡ3411に接するように（間は１ｍ）建つ礎石建物である。礎石列は１列、５ｍ分しか存在しないため建物の規模は不明である。

ＳＥ3516　屋敷中央にある直径1.2ｍの石組井戸である。深さは2.5ｍと浅い。天端石はほとんど崩れ落ちている。

ＳＥ3515　礎石建物ＳＢ3524の東にある直径0.9ｍの石組井戸である。深さは2.4ｍと浅い。天端石が２石残っているが、後は壊されており残存状況は悪い。

ＳＥ3514　後世の整地層と考えられるガラ石の下から発見された井戸で、上層の井戸か下層に伴うものかはっきりしない。直径0.8ｍ、深さ1.9ｍと小規模な井戸である。その他礎石とみられる石が、数個点在しているが、建物としてまとめるに至らない。



挿図２　ＳＡ3411とＳＢ3437

町屋群について

石積施設や井戸の状況から東西道路ＳＳ3525に面する町屋群が想定できるが、軒数や規模については不明な点が多い。

ＳＳ3525　発掘区東半の中央を東西に走る砂利敷道路である。検出した長さは20ｍ、幅は東側がやや狭く２ｍ、西側は３ｍを測る。かなり荒れており砂利敷は一部しか残っていない。道路を横断する溝ＳＤ3522の両側は石敷になっている。北側には石組側溝ＳＤ3519がつく。この道路はＳＸ3537付近で折れ曲がり南の武家屋敷（第57次調査地区）に続くと推定される。道路の南側は一段高くなっており、ここに２～３軒の町屋が想定できる。

58－2　間口はＳＸ3537付近からＳＤ3522まで約12ｍ、奥行きはＳＸ3444まで約８ｍと想定した。ＳＸ3537は溝だったらしいがすっかり壊されて確証がない。ＳＤ3522は敷地の境界であると同時に井戸ＳＥ3416に関連した溝であろう。井戸ＳＥ3416は直径1.4ｍ、深さ3.2ｍと規模が大きくその位置からも共同井戸の可能性が考えられる。敷地内には、ＳＦ3518を除いてほとんど遺構がない。ＳＦ3518は、1.3ｍ×1.3ｍ、深さ20cmと非常に浅い石積施設である。大きく削平された形跡もないので石積は当初から一段だったらしい。

58－3　間口はＳＤ3522からＳＤ1435までの約11ｍと考えられる。奥行きについては不明だが、ＳＦ1466が隣屋敷の石積み施設と考えれば、約９ｍとなる。建物については削平されて全くわからない。道路に面するように石敷施設ＳＸ1496がある。20cm四方の偏平な石を敷き詰めている。そのすぐ西には溝ＳＤ3521があり、東にも溝ＳＤ3520がある。道路近くには石積施設ＳＦ1465がある。１辺１ｍ程と小規模ではあるが、小さい石を丁寧に積み上げている。東屋敷との境界となる溝ＳＤ1435は中程で少し東に折れ曲がっている。

58－4　溝ＳＤ1435の東にある屋敷であって、磁石建物ＳＢ1448がある。この付近の遺構群（ＳＸ1496以東）は第31次調査で検出していたが、今回の調査地区と隣接しており、その位置づけもある程度可能となったのでここで再度紹介した。

58－5　道路ＳＳ3525に南面する屋敷で、東はＳＶ3510まで、西と北の境界がはっきりしないが、ＳＸ3537の延長線とＳＦ3517付近と考えられる。すると規模は間口９ｍ、奥行き９ｍとなる。遺構面がほとんど破壊されており、はっきりした遺構は、井戸ＳＥ3513だけである。石積施設ＳＦ3517は北側の屋敷との境界線上にあるが、これをこれまでの例から便所と考えると58－５に付属する施設であろう。石敷ＳＸ3526は石積施設ＳＦ3517と関連した施設と考えられる。第31次調査で井戸や石積施設を検出しており、この東にも屋敷が想定できるが、規模や建物などは全く不明である。

発掘された遺物（ＰＬ．16・17、第13・14図）

第58次調査で出土した遺物の総点数は、16,707点で、その内訳は、表３の通りである。陶磁器全体の割合は、越前焼が13.4％、土師質が78.5％で、この２種類で91.9％を占める。また、青磁、白磁、染付等の中国製陶磁器と、その補完関係にある鉄釉・灰釉等の瀬戸・美濃製陶器との割合は、6.1％：1.4％で、中国製品の方が４倍ほど多い。こうした傾向は一乗谷内の武家屋敷や町屋、寺院といった性格の異なる他の調査地区でもほぼ同じである。これは遺構ごとの陶磁器使用時の割合に加えて遺物が廃棄された後かなり移動していることによると考えている。

遺構全体が大きく削平されており、出土した遺物も細片が多いが、比較的まとまりも良かったＩイコウとその他の遺構について図化した。

越前焼　大甕の破片数が最も多いが、これは元の容器自体が大きいことにもよる。壺については、他の調査地区の統計よりも破片数が若干多くなった。これは、高さ40cmを超す大型の壺と小型の甕とは体部の破片では区別がつきにくいため、判別する人の主観が入るのでどうしても数値に偏りがでる。（表―３）

（１）は、口頸部が開き肩のなだらかな、高さ18cmの壺である。二次的に火を受けたためであろうか、表面はかなり荒れている。肩には板状のもので押さえた痕跡が残っており、腰部から底部にかけては上から下へ箆削り整形の跡がある。内面には、成形時に粘土の継目を指で押さえた跡が並ぶ。肩には箆描による窯印がある。（２）は、高さ10.3cmのいわゆる「お歯黒壺」である。口径部が小さく体部が大きく膨らむ。底部も大きめのものがつく。この種の壺の常として、器壁が厚い。破片のため不明だが口縁部に鳶口がつく可能性が高い。内壁には赤褐色の付着物があり、おそらく鉄漿であろう。（３）は無頸壺である。断面三角の大甕に似た口縁がつく。このタイプの壺には体部中央に貼付け突帯がつくことが多いがこの壺にはそれがない。肩には箆描きによる「大」字の窯印がつく。焼成が甘く肌色を呈し、柔らかい。（４）は、浅く内湾する鉢で、口縁部は２段になっている。

土師質土器　（５）は底部を指で突き上げた、いわゆる「ヘソ皿」である。（６）はナデ調整を行わない手づくねの皿である。（７）はＣ類の皿で、灯明皿として使用されている。

瀬戸・美濃焼　一乗谷では、鉄釉碗（天目茶碗）が多くて鉄釉皿は少なく、灰釉碗は少なくて灰釉皿が多い。これは、生産地である瀬戸・美濃の一乗谷と同じ時期の窯跡の調査（妙土窯跡発掘調査報告・昔田窯ー瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ｖ）でも同じ傾向を示す。（表―３）

（９）は、丈が高く全体に丸みを帯びた大窯初期の製品である。ただ口縁下のくびれはややはっきりしつつある。腰部にはサビ釉が施されている。胎土は「もぐさ土」にちかい。（11）は鉄釉香炉で、口縁部が水平に開き、体部はほぼ垂直に立ち上がる。腰部は一度膨らんで底部へすぼまっていく。脚部は粘土を丸めて貼り付けただけである。釉は、内側は口縁部だけ、外

面は腰部まで施されている。袴腰香炉の脚が退化したような印象を受ける。これと同じ器形の中国製香炉が、「サイゴー寺」（17次調査ー概報Ⅶ）から出土している。（10）は内湾する鉄釉皿で、口径は37.8cmと大きい。腰部から下はサビ釉が施されているようである。一乗谷ではあまり出土しないタイプで、一乗谷が滅亡する頃出現したと考えている。

中国製陶磁器　青磁の碗と皿の比は２：１で碗が多く、白磁の場合はそのほとんどが皿である。染付のそれは１：２で皿が多い。どの調査地区でもほぼ同様の傾向を示す。

（13）は青磁碗Ｃ群の無文のタイプで、口縁部はあまり開かず直立に近い。高台は径が小さく厚い。釉色は緑がかった青で、高台裏は環状に釉を拭き取っている。（17）は退化した箆描き蓮弁がつくタイプである。（16）は器壁が薄く大きく開く碗で、おそらく小さい高台がつく。釉色は薄い青色を呈する。（15）は、広い見込みからやや開き気味に立ち上がる雷文碗である。口縁下に崩れた雷文が巡る。雷文の碗は、一乗谷では出土例が少ない。

白磁皿は、量的には付け高台で口縁部が外反するＣ群の皿が多いが、今回、小型で削り出し高台から内湾気味に開くＢ群が目立った。（18）は轆轤跡の残るやや厚めの器壁に、削り出し高台を有する。釉は乳白色に近く、胎土はやや軟質である。高台部を除く全面に施釉されているが、見込みは円く拭き取られている。（19）はほぼ同じ器形であるが、高台部がいわゆる「桜高台」になっている。胎土は硬質で、釉も白色を呈する。全面に施釉され、見込みには重ね焼きのため４つの目跡が残る。（20）は、軟質のタイプで高台裏に「上」の墨書がある。

染付皿類は、外面が唐草文で見込みは十字花文のB_1群が主体を占める。（24）は碁笥底で口縁部は外反する。外面の文様は退化しているが唐草文の系統とみられ、見込みにはＣ群と共通する草花文が描かれている。一乗谷では、こうした器形と文様の組合せは珍しい。（27）は内湾する皿で文様は見込みにしかない。Ｅ群でも新しいタイプで、一乗谷では少なく紀州根来寺跡等でよく見られる。

朝鮮製陶磁器　（28）は、胎土や焼成などいわゆる「ソバ茶碗」と共通する。見込みと高台畳付けには重ね焼きのための砂目跡がある。これらの目跡にはヤスリが掛けられている。

金属製品　（29）は薄い銅製の皿状で中央に同じく銅製の突起があり、燭台ではないかと推定している。

石製品　石製品は笏谷石製品が多く、バンドコや盤のほか用途や形態さえよくわからないものが多い。（33）は笏谷石製の風炉で、表面を非常に丁寧に研磨してあり、おそらく漆を塗っていたものと思われる（29次調査で漆を塗った風炉が出土したが、漆は剝がれてしまった）。笏谷石製の風炉には、短い脚が付き口縁部が内側に屈曲するタイプ（33）と、脚を体部から鬚状に作り出すタイプの２種類ある。茶臼が数点出土した。（34・35）は花崗岩系の石材を使用しており、堅くて作りも丁寧である。（36）は、やや軟質の石材で表面が摩滅しており、臼の部分が内湾したり脚の部分が少し高いなど形態もやや異なる。

表3　第58次調査遺物一覧表

部門		区画	表土		Iイコウ		ガラ石24㎝以東		明褐色土24㎝以西		深掘トレンチ		その他遺構		計	
			片数	%	片数	%	片数	%	片数	%	片数	%	片数	%	片数	%
日本製陶磁器	越前焼	壺	207		223		114		173		48		122		887	
		甕	212		240		71		104		7		82		716	
		鉢	23		25		17		9		1		10		85	
		擂鉢	116		92		93		44		16		75		436	
		他	1		12		1		1		1		20		36	
		計	559	15.6	592	11.8	296	25.9	331	7.0	73	16.0	309	17.3	2,160	13.0
	土師質	皿	2,465		3,860		633		4,129		333		1,148		12,568	
		羽釜	11		10		3		12		1		1		38	
		土鈴	2		2		0		0		0		6		10	
		芯押え	0		1		0		1		0		0		2	
		他	1		7		0		5		1		0		14	
		計	2,479	69.2	3,880	77.6	636	55.5	4,147	87.6	335	73.3	1,155	64.6	12,632	75.6
	鉄釉	碗	21		11		9		7		2		3		53	
		皿	1		2		1		0		0		2		6	
		壺	11		11		5		5		0		5		37	
		他	3		1		1		1		0		2		8	
		計	36	1.0	25	0.5	16	1.4	13	0.3	2	0.4	12	0.7	104	0.6
	灰釉	碗	6		2		2		2		0		1		13	
		皿	6		4		6		4		0		3		23	
		鉢	8		10		3		3		2		8		34	
		他	3		2		1		0		1		1		8	
		計	23	0.6	18	0.4	12	1.0	9	0.2	3	0.7	13	0.7	78	0.5
	瀬戸焼		23	0.6	8	0.2	7	0.6	7	0.1	0		3	0.2	48	0.3
		計	82	2.3	51	1.0	35	3.1	29	0.6	5	1.1	28	1.6	230	1.4
	瓦質	香炉	0		3		2		0		0		2		7	
		火鉢	3		2		0		7		0		0		12	
		風炉	1		16		1		0		0		0		18	
		他	5		7		0		0		0		1		13	
		計	9	0.3	28	0.6	3	0.3	7	0.1	0		3	0.2	50	0.3
	唐津計		0		1	0.02	0		0		0		0		1	0.01
	国産他		1	0.02	3	0.05	0		0		0		1	0.02	5	
	計		3,130	87.4	4,555	91.0	970	84.7	4,514	95.4	413	90.4	1,496	83.6	15,078	90.2
中国製陶磁器	青磁	碗	42		60		19		31		10		35		197	
		皿	27		30		7		24		1		5		94	
		香炉	6		4		0		4		0		0		14	
		鉢・盤	8		6		9		5		0		1		29	
		壺・花生	5		2		1		0		0		3		11	
		他	2		0		0		1		0		0		3	
		計	90	2.5	102	2.0	36	3.1	65	1.4	11	2.4	44	2.5	348	2.1
	白磁	碗	6		2		0		3		0		1		12	
		皿	125		91		33		53		4		28		334	
		坏	4		1		2		2		1		2		12	
		香炉	1		2		1		1		0		0		5	
		他	1		0		0		0		0		0		1	
		計	137	3.8	96	1.9	36	3.1	59	1.2	5	1.1	31	1.7	364	2.2
	染付	碗	34		33		5		7		0		6		85	
		皿	60		51		19		23		2		32		187	
		坏	1		1		0		0		0		1		3	
		他	0		1		0		0		0		1		2	
		計	95	2.7	86	1.7	24	2.1	30	0.6	2	0.04	40	2.2	277	1.7
	中国他		3	0.05	1		0		1		0		0		5	
	計		325	9.1	285	5.7	96	8.4	155	3.3	18	3.9	115	6.4	994	5.9
朝鮮製陶磁器		碗	0		1		0		0		0		3		4	
		皿	4		4		4		1		1		1		15	
		他	0		0		0		1		0		0		1	
		計	4	0.1	5	0.1	4	0.3	2	0.04	1	0.2	4	0.2	20	0.1
交趾三彩風			0		1	0.02	0		0		0		0		1	
陶磁器計			3,459	96.6	4,846	96.9	1,070	93.4	4,671	98.7	432	94.5	1,615	90.3	16,093	96.3
金属製品		銅銭	3		17		3		7		11		8		49	
		釘	15		34		11		19		2		55		136	
		鉄鏃	0		0		0		1		1		0		2	
		金具	1		1		0		1		0		2		5	
		他	5		2		1		9		1		6		24	
		計	24	0.7	54	1.1	15	1.3	37	0.8	15	3.3	71	4.0	216	1.3
石製品		バンドコ	16		25		12		4		2		5		64	
		風炉	1		0		0		0		1		39		41	
		硯	7		2		2		2		0		5		18	
		盤	6		19		8		3		2		22		60	
		臼	1		2		3		0		0		7		13	
		砥石	6		2		2		2		0		2		14	
		他	19		31		17		10		3		7		87	
		計	56	1.6	81	1.6	44	3.8	21	0.4	8	1.8	87	4.9	297	1.8
木製品		箱の蓋板	0		0		0		0		0		1		1	
		漆片	0		0		0		0		0		1		1	
		他	1		1		0		1		1		2		6	
		計	1	0.03	1	0.02	0		1	0.02	1	0.2	4	0.2	8	0.05
その他		雲母	2		4		6		0		0		4		16	
		近世	36		14		9		1		1		7		68	
		他	4		2		1		1		0		1		9	
		計	42	1.2	20	0.4	16	1.4	2	0.04	1	0.2	12	0.7	93	0.6
合計			3,582	100.0	5,002	100.0	1,145	100.0	4,732	100.0	457	100.0	1,789	100.0	16,707	100.0

第 60 次 調 査

第60次調査は、国の名勝に指定されている諏訪館跡庭園と湯殿跡庭園の導水路を検出することを目的で実施した。調査は、昭和62年12月８日から12月24日までの短期間の日程であったが、以下のとおり多くの成果を上げることができた。

諏訪館跡庭園導水路の調査（ＰＬ．18）

諏訪館は、朝倉義景が小少将を住まわせるために諏訪の谷に建てた館と言われ、庭園にウエイトが置かれている。昭和42年度の調査で、上下２段からなる豪壮な池泉回遊式庭園であることが判った。今回の調査では、谷川から庭園に給水するための導水路を検出するために、上段の奥まった所にある滝石組み付近から谷川までの間に７ケ所（約50m²）のトレンチをいれた。その結果、導水路は滝口付近の２ｍ分は削平されていたが、その奥で幅約0.3m、深さ約0.2ｍ、長さ５ｍ分の溝が発見された。底はきれいに石が敷かれており、滝口寄りの２ｍ分には、１ｍ前後の巨石５枚で蓋がされており暗渠構造となっていた。勾配は、約20度38分と急であり、開渠部分の３ｍ分は、厚さ約0.6mのきれいな山土で埋められていた。これは、庭園の石橋をとおり上蛇谷へ登る山道としてここが後世利用された時に整地されたものであろう。導水路の先は、削平されており、４本のトレンチを設定してその行方を捜したが、発見できなかった。暗渠の下層からは、高さ1.6ｍの石垣が検出された。この石垣の基底部は、上段庭園滝口よりも、約0.6m低く、かつ固く叩きしまったジャリ面になっていた。青磁盤、擂鉢、白磁皿、土師質皿などが出土した。この石垣は、庭園や導水路より古い遺構であることは確実であることから、諏訪館は、もとは土塁石垣を巡らせた館であったが、その後、作庭する際に石垣を完全に埋めて築山を作り、その築山の中を暗渠で導水していたものと判明した。

湯殿跡庭園導水路の調査（ＰＬ．19）

湯殿跡庭園も、昭和42年度の調査で、池泉回遊式庭園であることが判明している。今回の調査（約20m²）では、むかって左奥の滝口付近から掘り始めた結果、自然石を用いた幅約0.4ｍ、深さ約0.3ｍの水路が観音山の山際を南へ１度13分というゆるやかな勾配でもって23ｍ分検出できた。底石もきれいに敷かれていたが、その先は空濠近くのため削平されており、観音山の南裾を巡るかどうかは、明らかにすることができなかった。

今回の調査は、朝倉氏遺跡の当時の作庭技術の水準がいかなるものであったかを知る上で貴重な資料がえられたのはもちろん、日本の数少ない室町時代後半の代表的庭園の全体像を把握する上からも意味ある調査であったと考えられる。

環　境　整　備

遺跡の保護を図り、また、これを広く活用し、歴史と生きた対話をすることを目ざして、史跡公園化を進めている。今年度は、この第５次５ケ年計画の初年度であって、計画に基き、昨年の第54・第56次の発掘調査区の保存整備と、遺跡内の見学ルートの整備を図るための園路造成を行った。以下、その概要を述べる。

第54次調査区整備工

この工事は、昭和61年度に第54次発掘調査として実施した、福井市城戸ノ内町字平井地係約1,800㎡を対象とする保存整備工事である。

この地区は、これまでの第10・11・15・24・25・29・30次の各調査によって、南北方向の道路を中心として比較的大規模の武家屋敷が整然と配されていることが明らかとなっている。そこで、こうした計画的に造られた町の様子を示すことを主眼として、面的な拡がりを持った整備を進めており、今回の整備地を加えれば、約14,130㎡が平面復原を中心に整備されたこととなった。また、この一画の最も屋敷内の様子が良くわかる約30ｍ四方の武家屋敷が立体的に復原され、具体的にその様子も示されている。

今回の工事対象地は、こうした武家屋敷群の西に位置する大規模なものであって、南北方向の道路に面して、約30ｍの敷地間口を持ち、西の山裾までの奥行は約60ｍである。この西の山裾を除く東・南・北の三方に土塁を巡らしており、この道路に面する東土塁に約３ｍ（10尺）の門を開いている。屋敷内の遺構の多くが削平されており、遺構の遺存度は良好とはいえないものの、下層において建物も検出されており、屋敷内の構成が伺われる。そこで、今回の整備方針は、屋敷の区画を明示することを主眼とし、合せて、この地区の表示の基準時期である最終時の遺構である門建物や井戸・石積施設を露出展示し、また、下層で検出され、この屋敷の中心となる建物であって、こうした構成がほぼ踏襲されたと推定される建物を復原的に表示することとした。

まず、土塁石垣の内、崩れたり倒壊の危険の考えられる所を、こうした石垣に用いられていたと推定される発掘調査時に出土した石を用いて積み直した。そして、この土塁の上部は山土で整え芝張とした。門跡は、石段廻りを砂利混ソイルセメントで整え、４個の礎石から、正面約2.4ｍ（８尺）、側面約1.5ｍ（５尺）の薬医門と推定される門建物は、レミファルト舗装により表示した。上部に復原的に示した下層建物は、同位置であって、東西約7.5ｍ、南北約10.6ｍであり、これをソイルセメント舗装とした。また、井戸は、石積を若干補修し、出土材から推定復原した笏谷石（凝灰岩）製の井戸枠を設置し、石積施設は、この石積を補修し、底をソイ

ルセメントで固めた。屋敷内は、玉砂利敷舗装とした。また、この屋敷内の排水を考え、山裾からの湧き水に対して排水溝を設けると共に、この屋敷を東西に貫く、ネトロン（φ100）を用いた暗渠排水路を設けた。

第56次調査区整備工

この工事は、昭和61年度に第56次発掘調査として実施した、福井市城戸ノ内町字下城戸地係約1,200㎡を対象とする保存整備工事である。

下城戸は、この谷を造る一乗谷川が足羽川に合流する谷の出口近くに設けられたもので、この上流約1.8㎞に存在する上城戸とともに、城下町一乗谷の中心となる「城戸ノ内」を形成するもので、谷を閉塞する高さ約4.5m、幅約12mの土塁と幅約10mの外濠を中心に、この内側の山から突出する幅約17mの土塁から構成される城戸口を持つ。城戸の内側には、すぐ近くまで町屋群が存在したことも第35次調査によって判明している。

今回の対象地は、この城戸口を構成する２つの土塁を主とし、この石垣の修復と、内の小土塁によって区画された広場である。城戸口を構成する土塁側面に積まれた石垣は、径２～４ｍの巨大な石を用いたものであり、高さは約４ｍと推定される。また、内側の広場を区画する西の山裾から延びる東西の小土塁は、幅約1.5ｍ程であって径0.5～１ｍ程の石を用いている。この広場の北、城戸土塁裾には、建物跡も検出されている。城戸口の石垣や小土塁石垣の積み直しと土塁の芝張、そして広場の建物跡の表示を実施した。なお、城戸口石垣の修復に当っては、こうした石垣の工法等に詳しい中村強氏（中村石材工業株式会社）の指導を受けた。

石垣は一部天端まで残る所もあり、また壊された石垣の石も付近に存在しており、これを基に復原案を作成し、これに基き、現場における仮置等の検討を加え、若干の修正を行い、各石の位置を決定した。石垣の基礎部は残存するものの一部に沈下がみられる。これは一旦取りはずし、砂利等で基礎を作り、据え直した。また、石垣の裏込は当初の工法に習い玉石と砂利を用いた。巨大な石であるため、トラッククレーンを用い、この吊り上げ時に合せて石の重量も測定した。石は大小様々であるが、最大のものは約45ｔであった。土塁は天端・法面共芝張とした。なお、法面の傾斜は45°を越える所もあって、竹串で入念に張り付けた。また、広場は砂利敷舗装とし、建物の存在した土塁裾は砂利混ソイルセメント舗装、そして、この建物の前の庇と推定される幅0.9ｍは豆砂利敷とした。

園路造成工

今年度は、昨年に引き続き、武家屋敷の集中する平井地区に約45ｍ造成した。山裾に存在した農道を利用し、広い遺跡内の見学には自転車の利用も多く、また、将来の遺跡管理には軽車輛の使用も見込まれることから、これらを配慮し、幅2.4ｍとし、赤土と砂利によって舗装した。

第57次調査区出土の茶器類

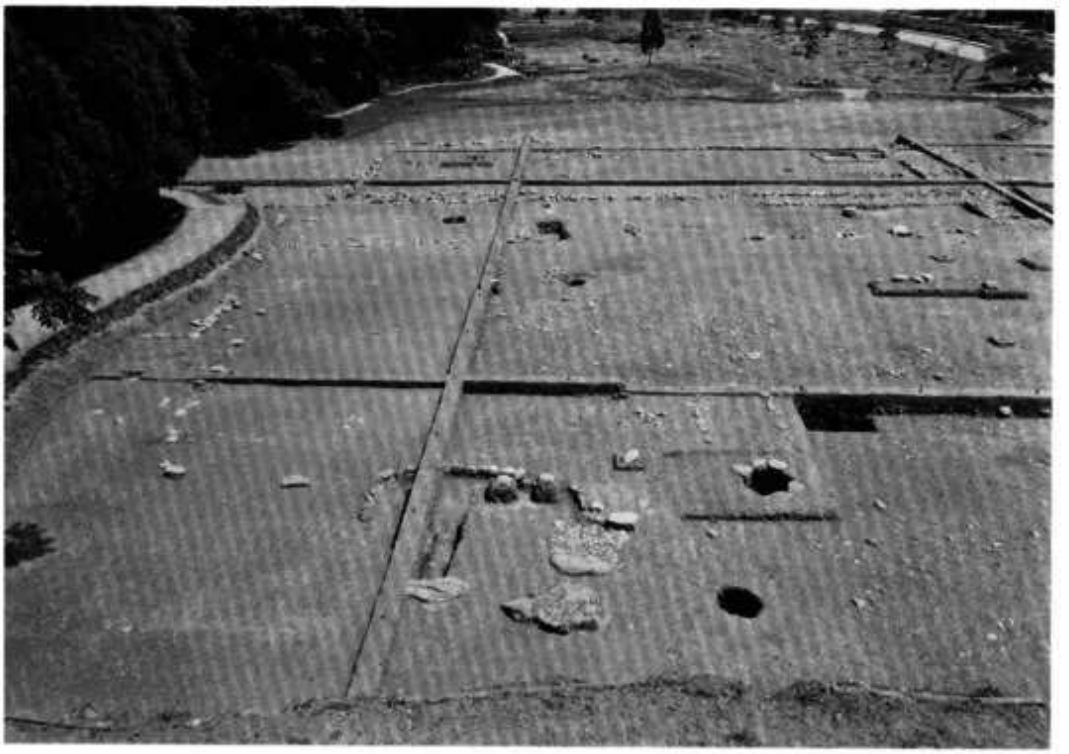
第56次調査区整備工（北東から）

全　景　（北西から）

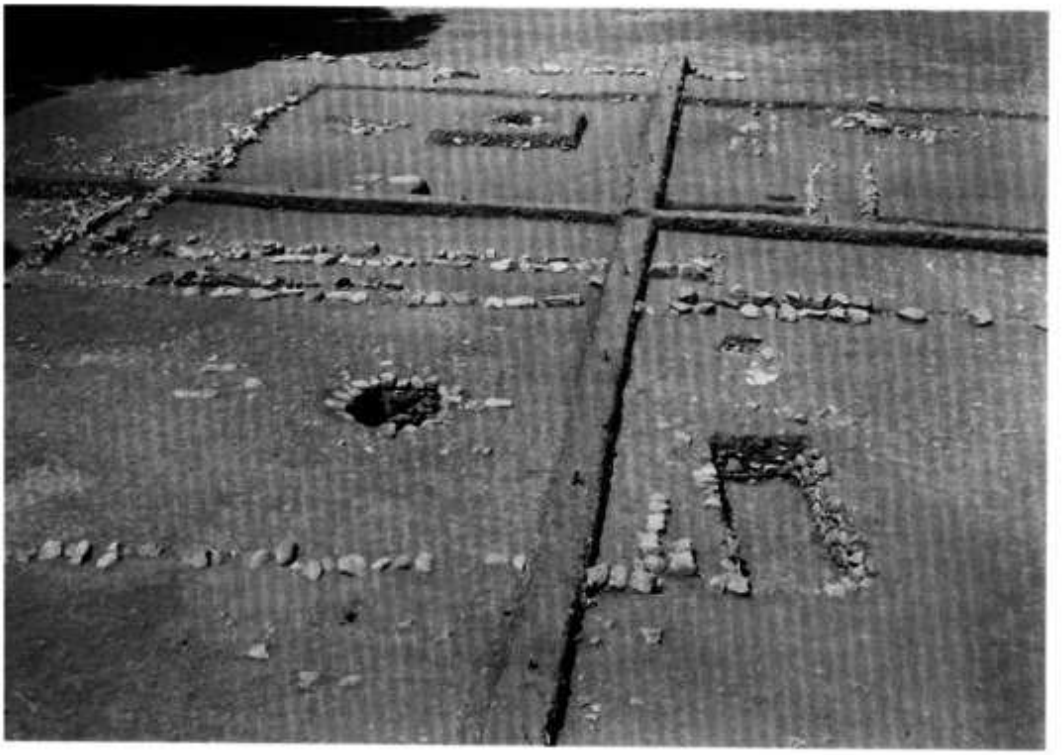
同　上　（南から）

東　部　（北から）

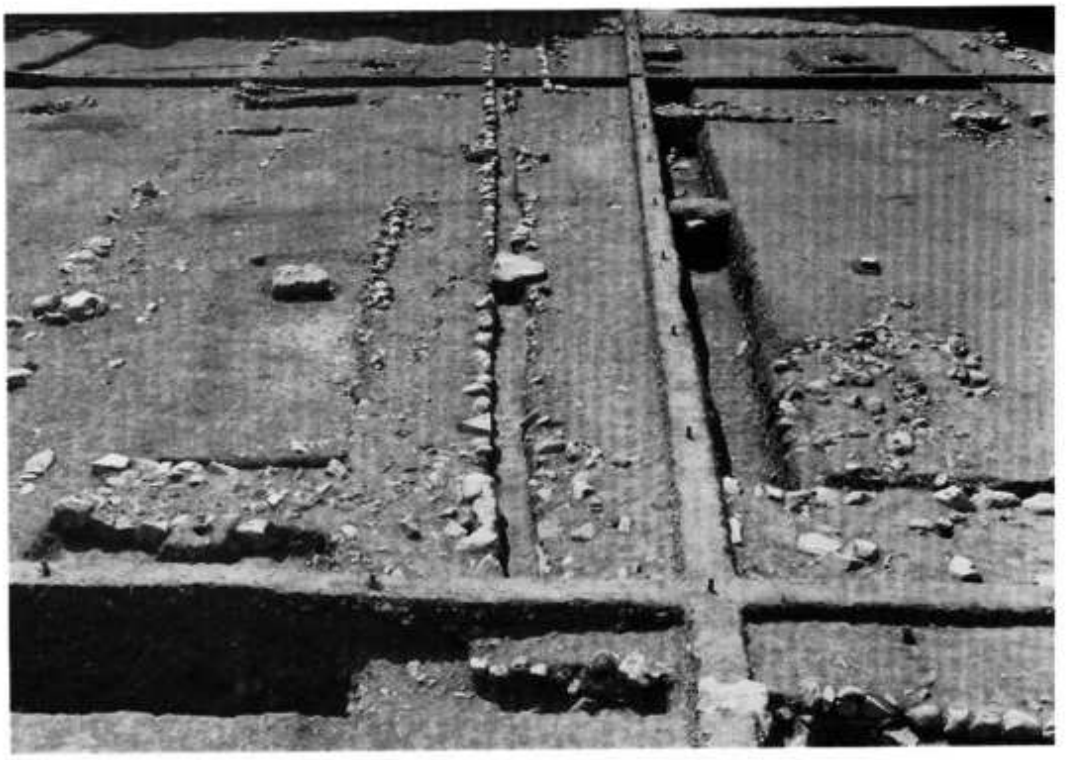
同　上　（南から）



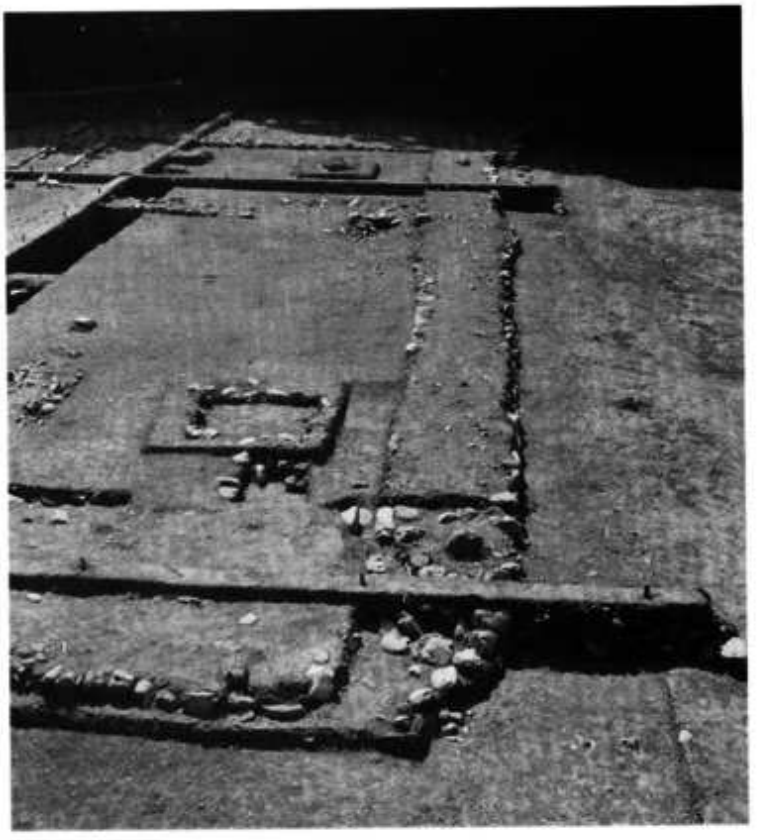
西　部　（南から）



西北部　（南から）



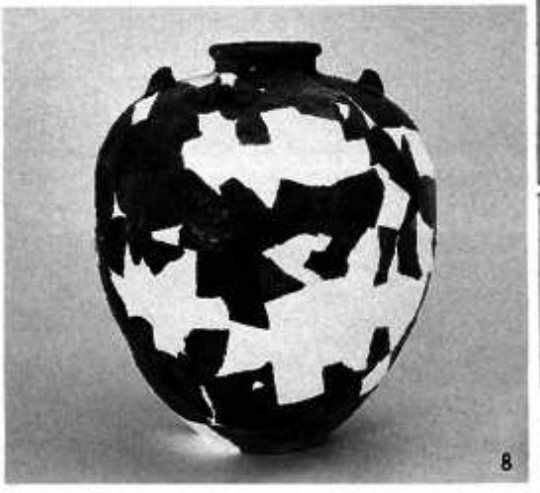
溝ＳＤ3432・石列ＳＶ3414・3415（東から）

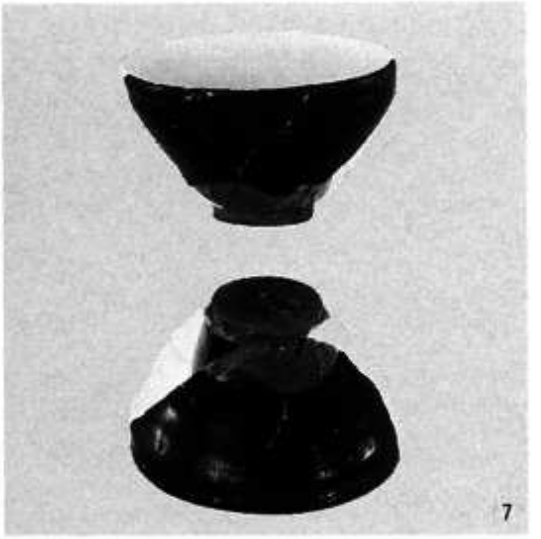


土壇ＳＡ3411
（東から）

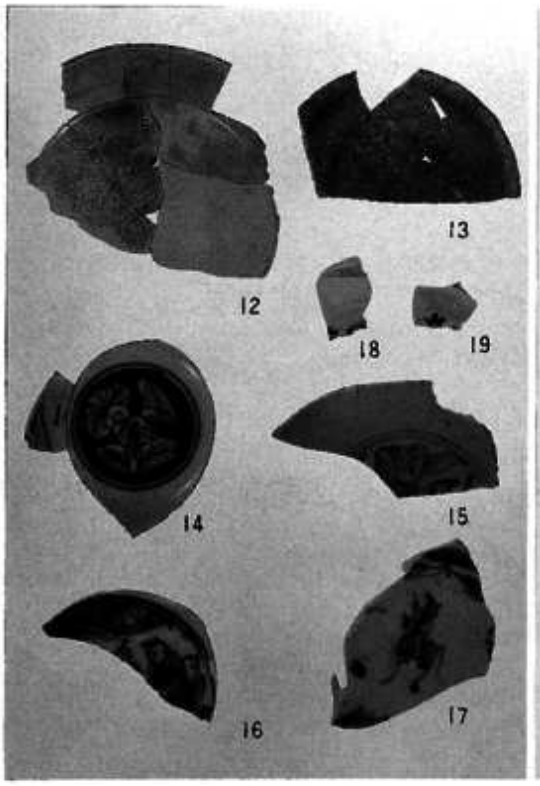
石列ＳＶ3412・3413（南から）

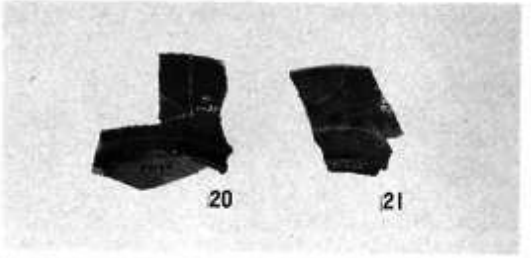
庭ＳＧ3443　（北から）

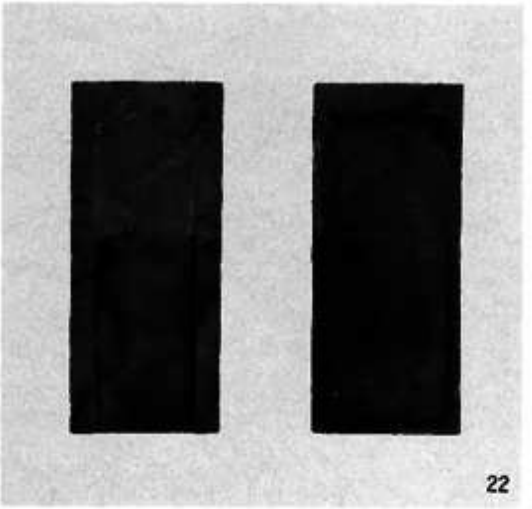


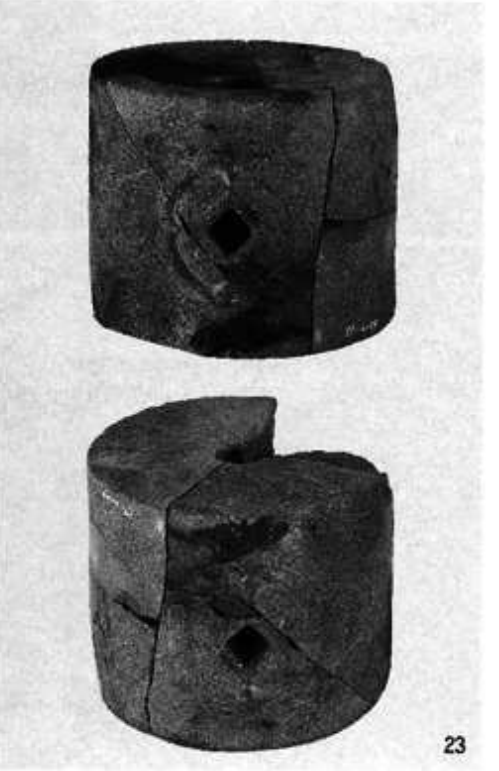


SE3419出土遺物　2　越前壺、5　灰釉皿、6　白磁皿、7　黒釉碗、
8～10　褐釉四耳壺、11　褐釉壺

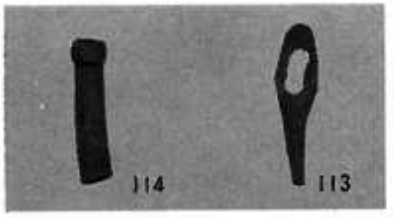


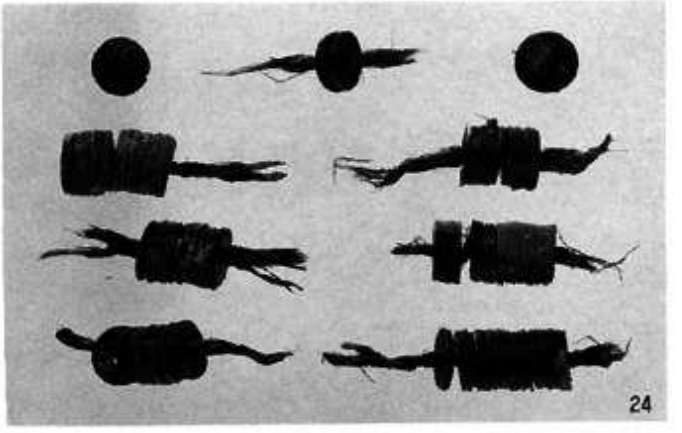


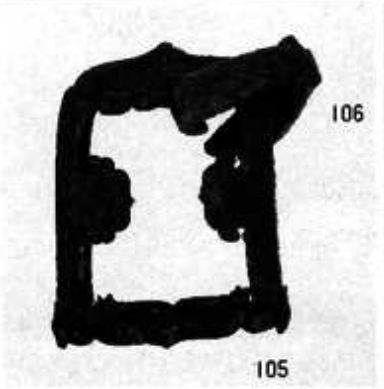


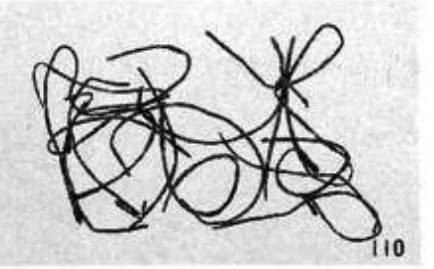


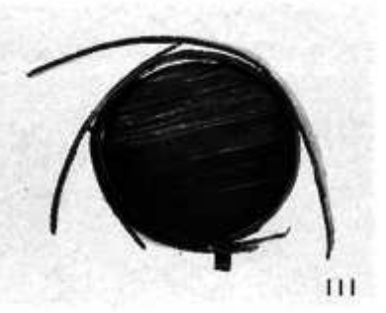
SE3419出土遺物　12・13　白磁皿、14・15　染付碗、16・17　染付皿、18・19　赤絵皿、20・21　交趾皿、22　石硯、23　茶臼



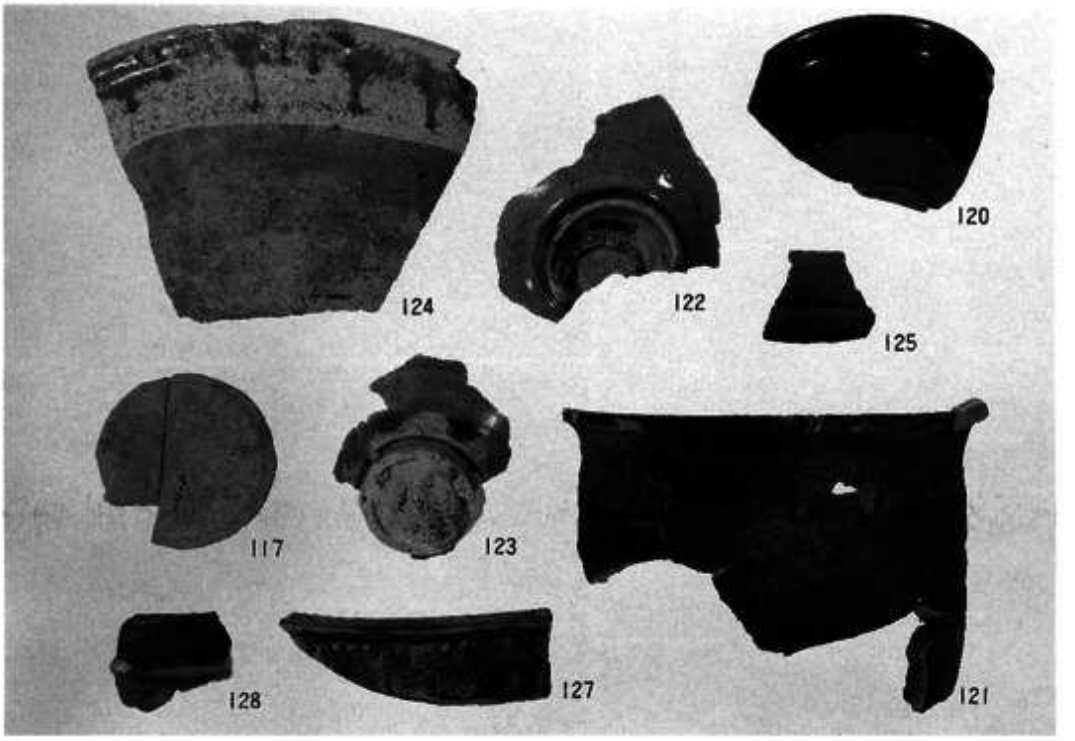




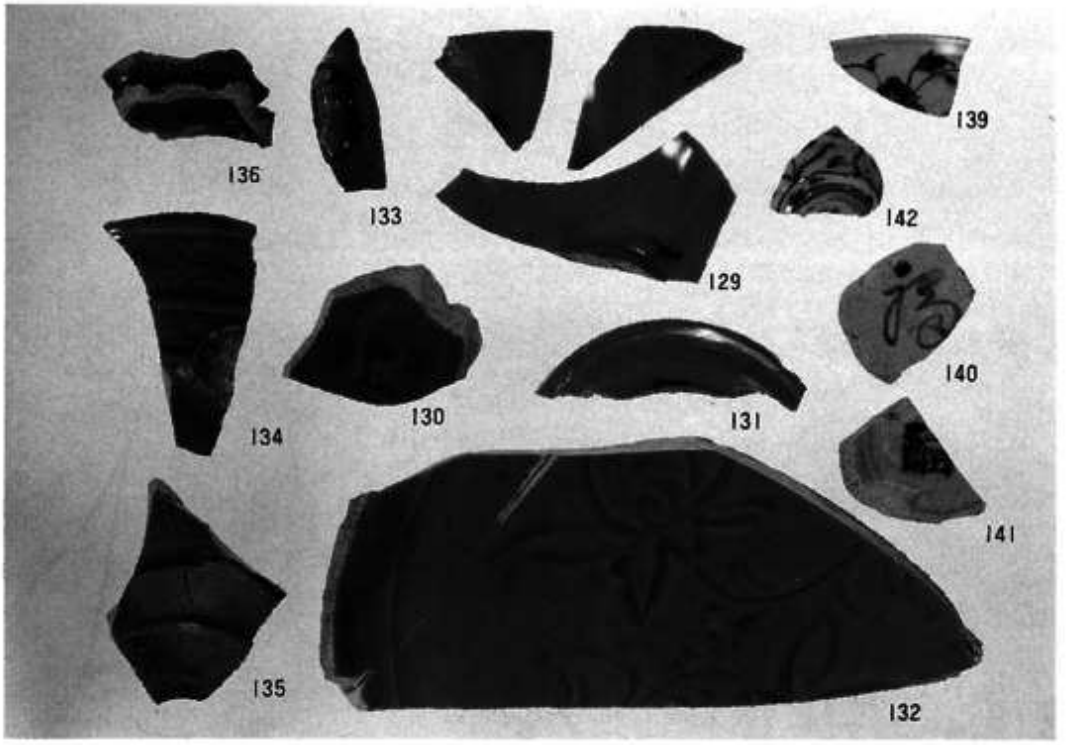




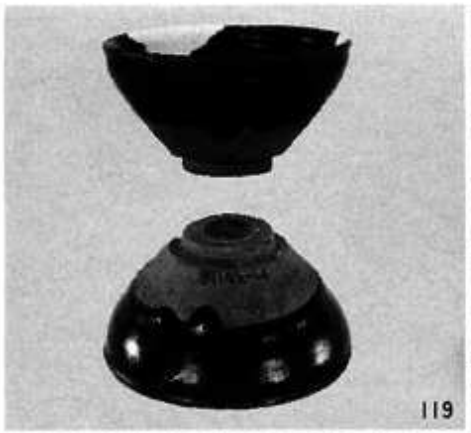
SE3419出土遺物　24　銅銭、105・106　青金、107　貴金、108　金箔、109　覆輪、110　針金、111　曲物、112　駒石、113・114　加工骨、116　布片

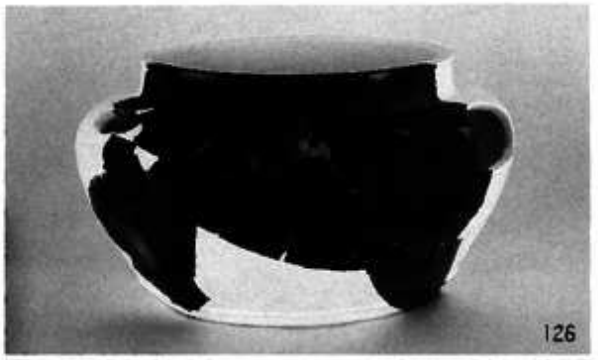


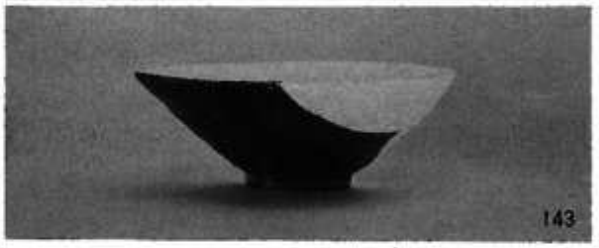
117　土師質円盤、120　鉄釉碗、121　鉄釉匣鉢、122・123　灰釉碗、124　灰釉片口鉢、
125　灰釉香炉、127　瓦質風炉、128　瓦質羽釜

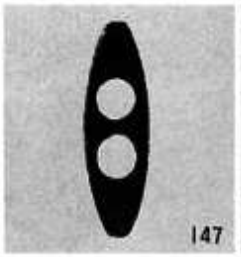


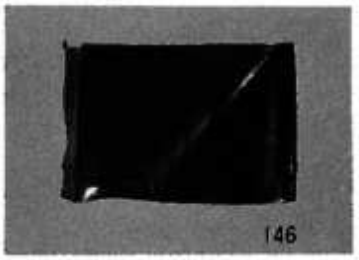
129・130　青磁碗、131　青磁皿、132　青磁盤、133　青磁瓶、134・135　青磁植木鉢、
136　青磁不明、139～141　染付碗、142　染付坏

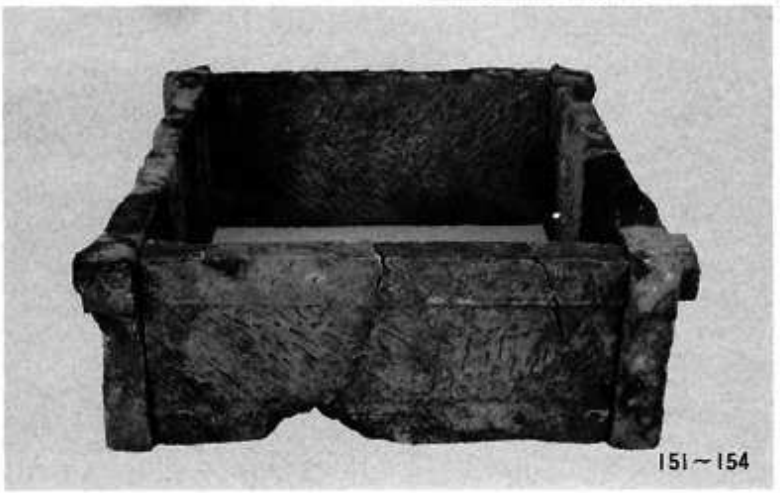






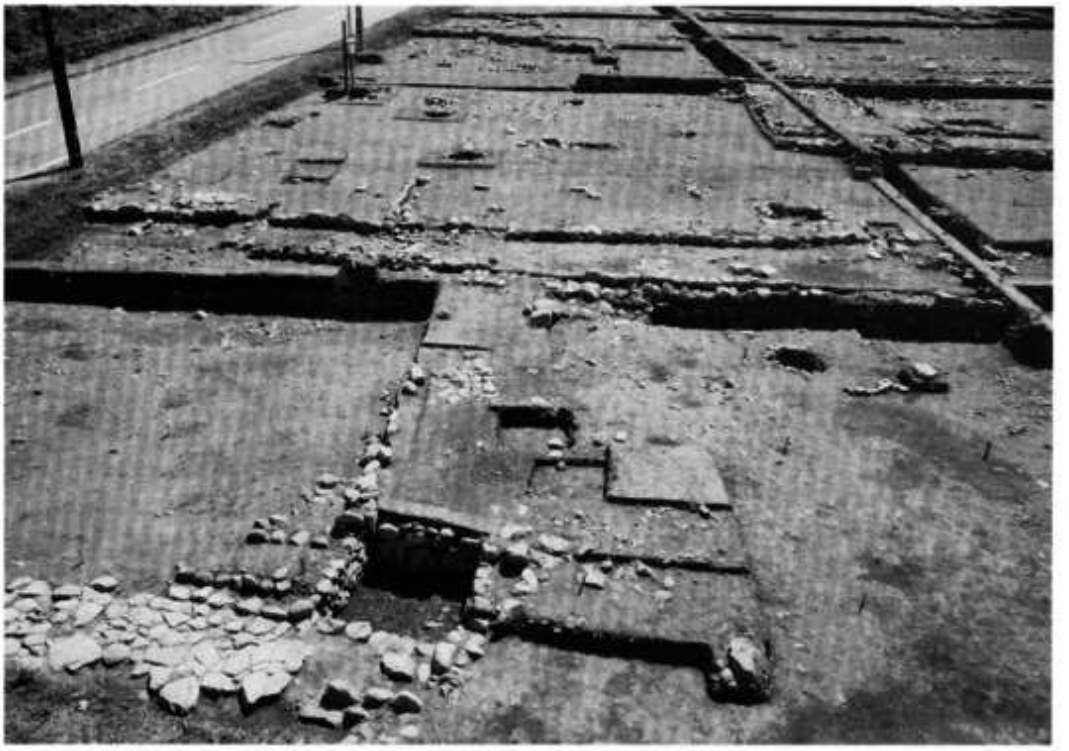




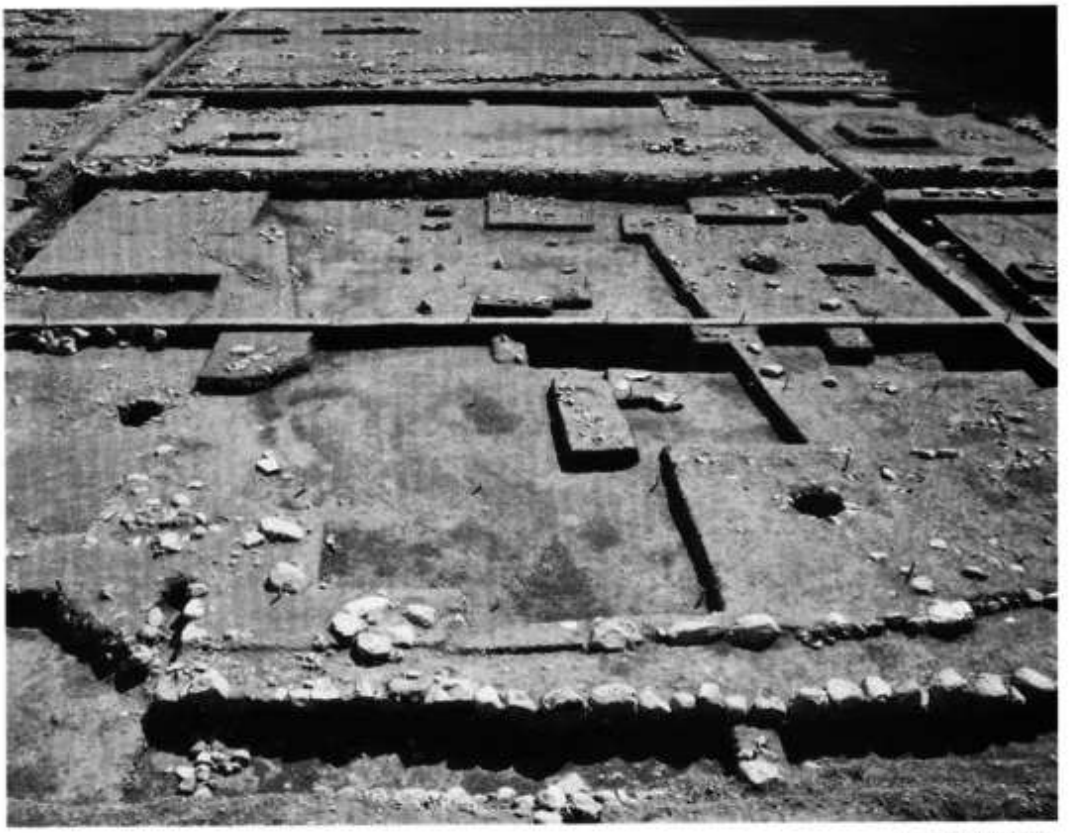


119　鉄釉碗、126　瓦質風炉、137・138　白磁皿、143　ソバ茶碗、145　蓋、
146　板状金具、147　鞆、148　櫛、150　硯、151～154　井戸枠

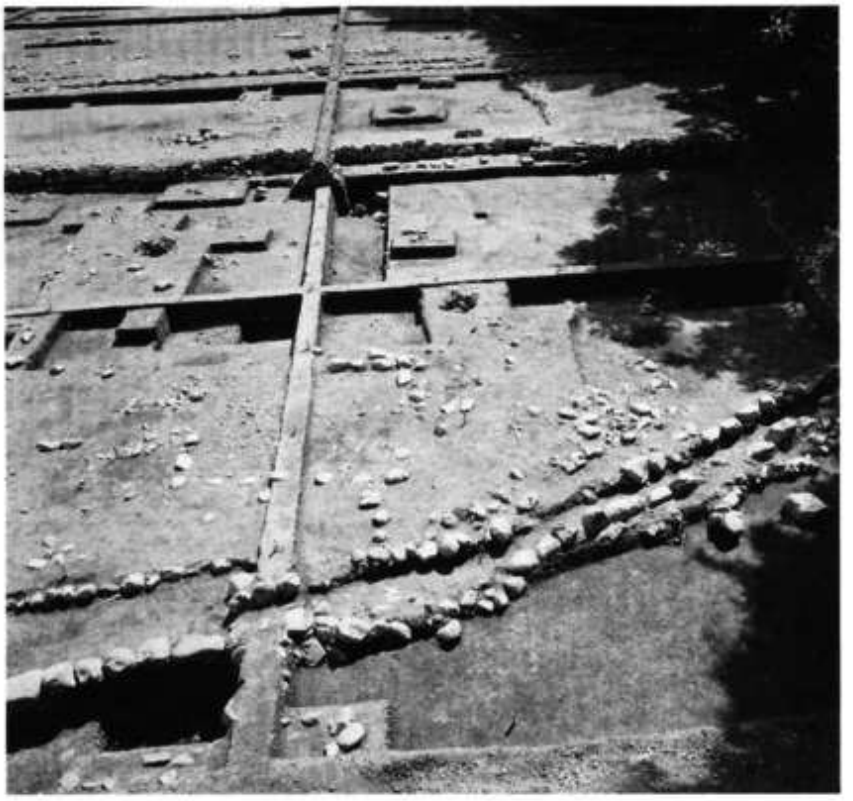
発掘区全景（東から）



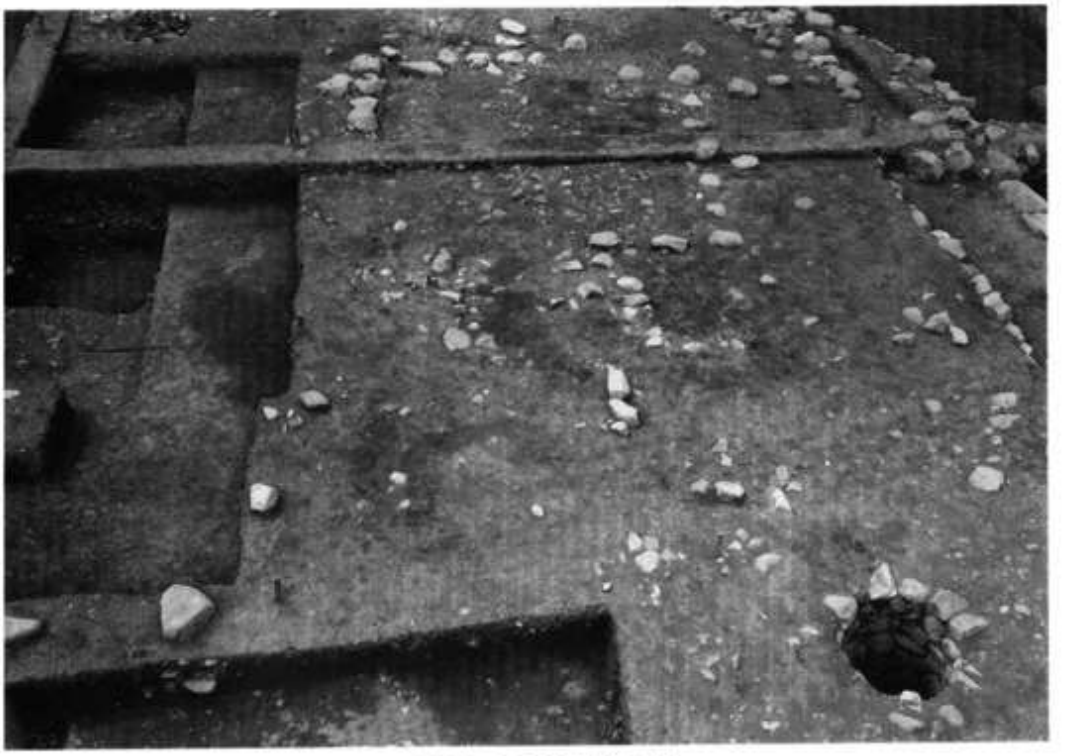
発掘区東$\frac{1}{3}$（北から）



▲発掘区中央部
(北から)



◀発掘区西$\frac{1}{3}$
(北から)

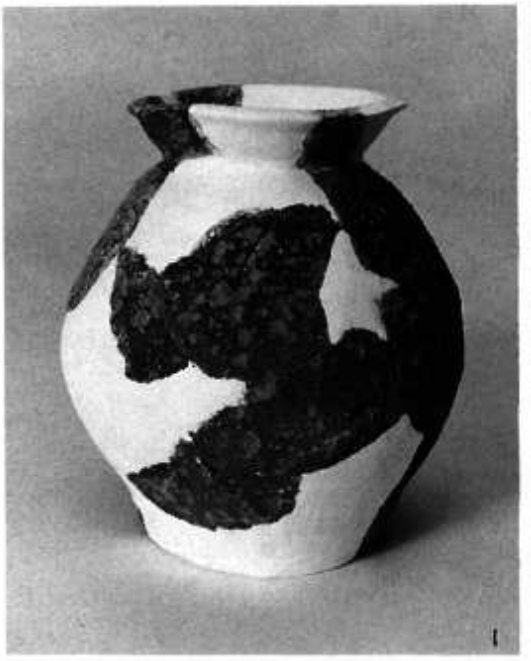


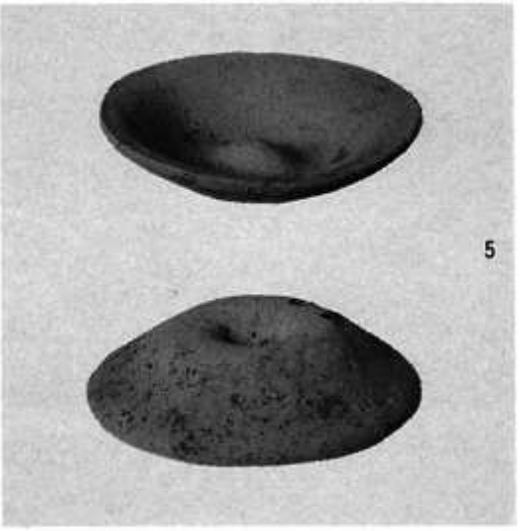
SB3524とSE3515（東から）

SS3525とSD3519（西から）

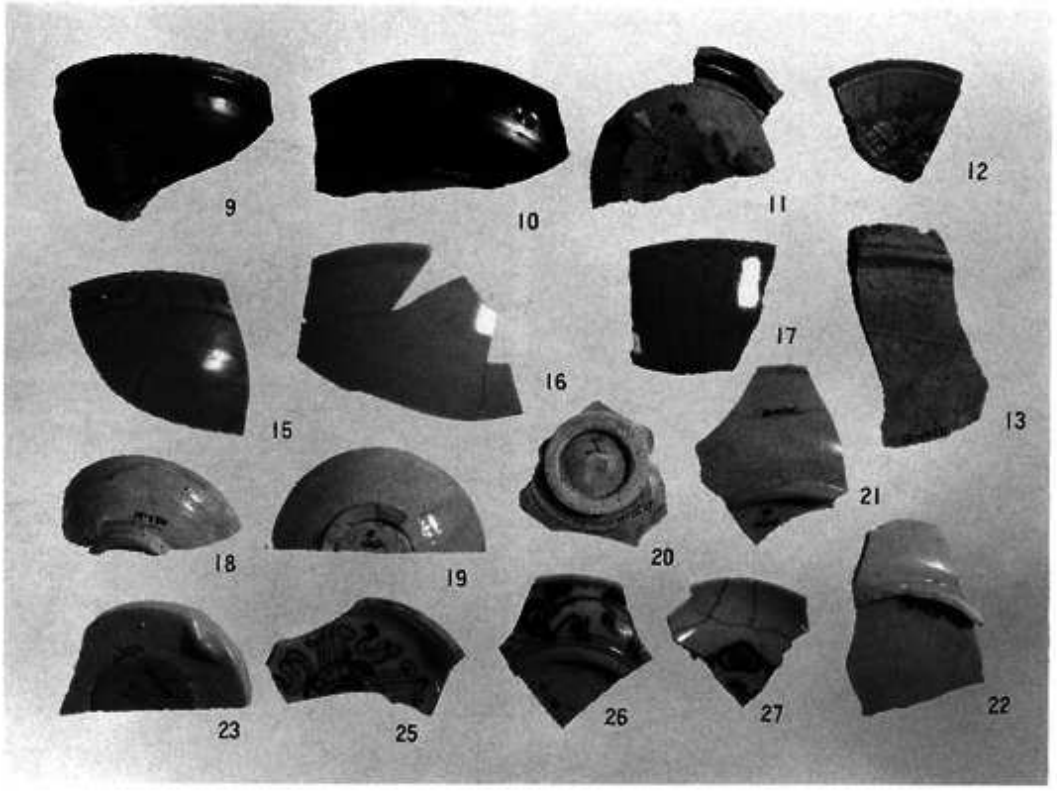
◀SS3525とSX1496
(東から)

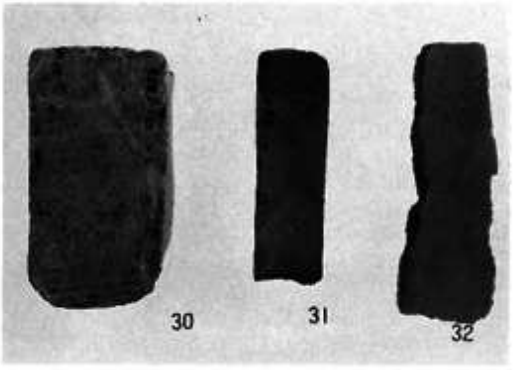
▼SF3517とSX3526
(東から)





1　越前焼壺、4　越前焼鉢、5～7　土師質皿、13　青磁碗、24　染付皿、28　朝鮮製杯、29　銅製燭台



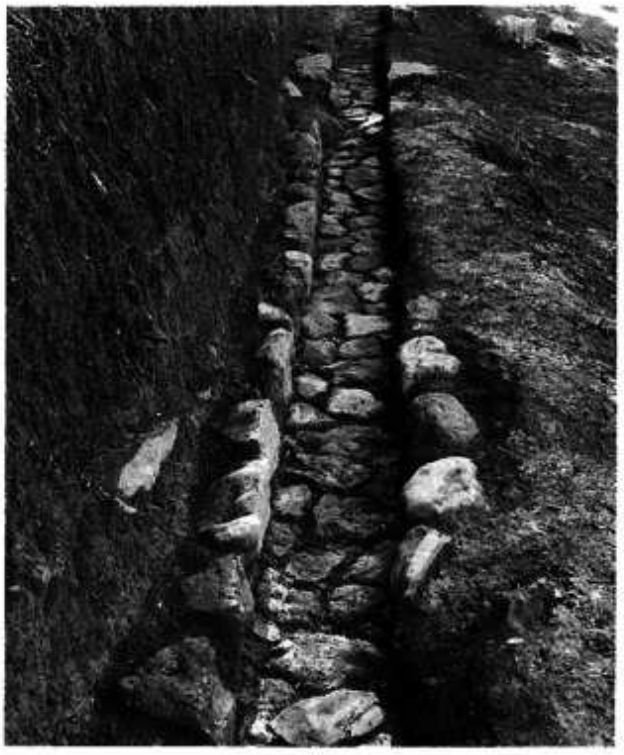


9　天目茶碗、10　鉄釉皿、11　鉄釉香炉、12　灰釉卸皿、13　灰釉鉢、15～17　青磁碗、18～22　白磁皿、23　白磁香炉、25～27　染付皿、30～32　砥石、34～36　茶臼

諏訪館跡庭園導水路と土塁石垣

諏訪館跡庭園導水路

石垣下ジャリ面出土の青磁盤



湯殿跡庭園導水路

湯殿跡庭園導水路（滝口付近）

全　景　（東から）

同　上　（南東から）

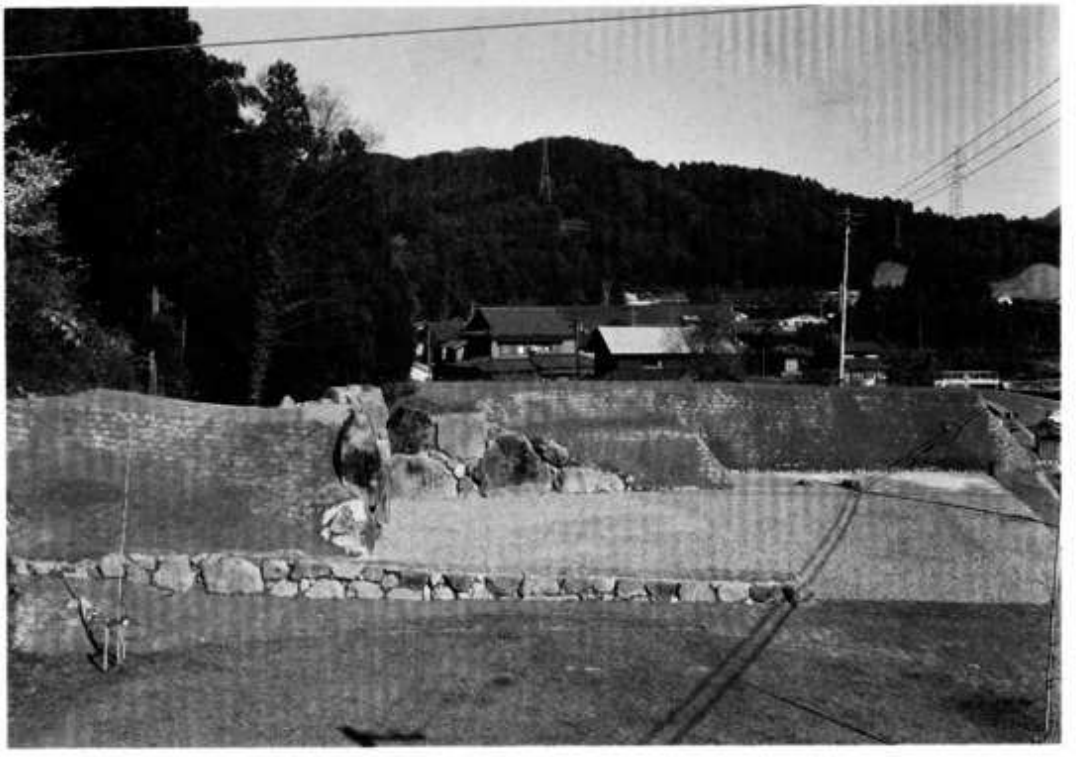
北土塁
（東から）

南土塁
（東から）

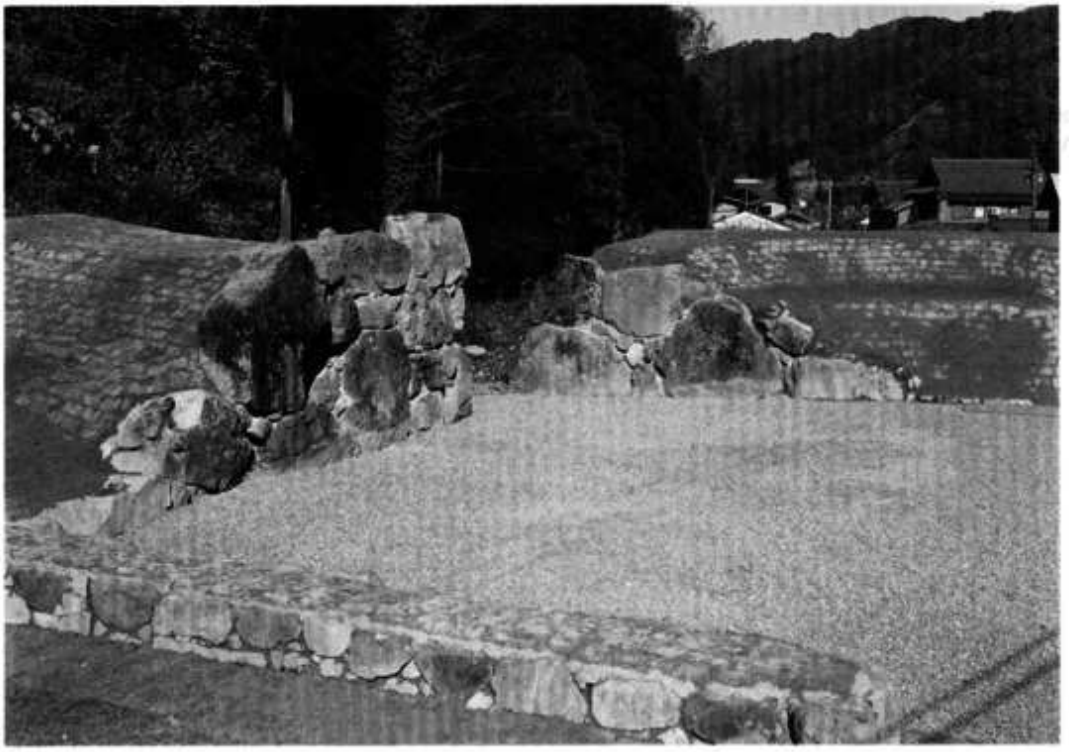
北土塁南面石垣（南から）

門・下層建物・井戸（東から）

全　景　（南東から）



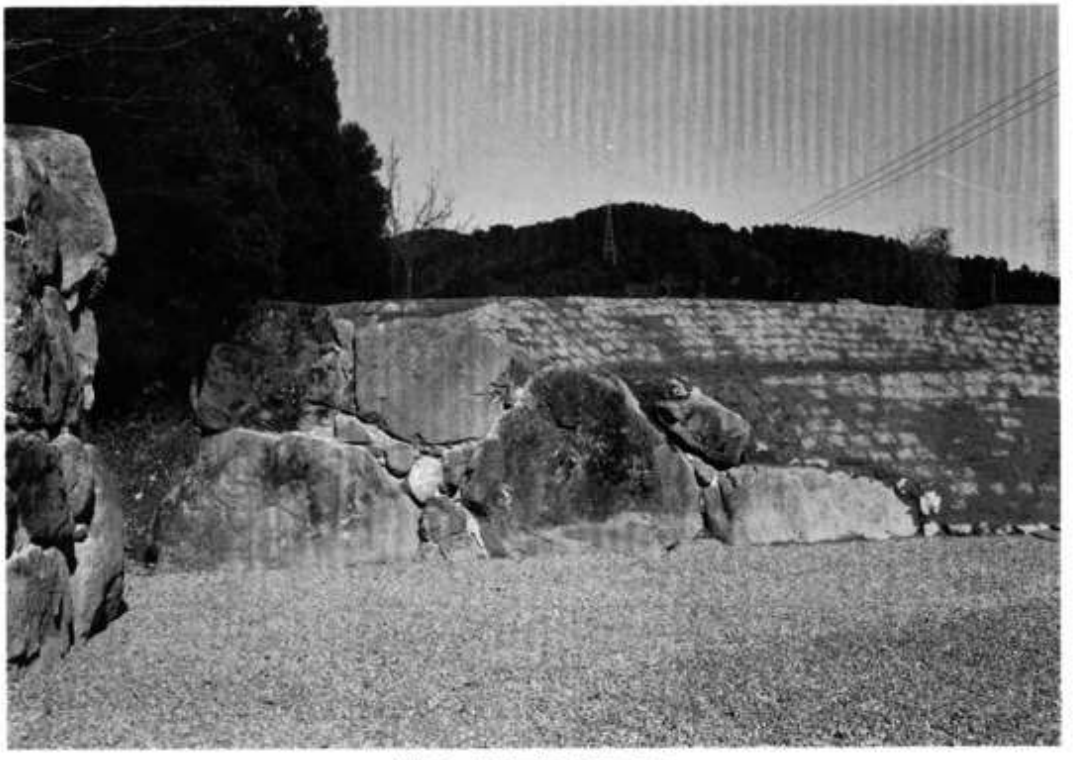
同　上　（南から）



城戸内側広場（南東から）

同　上　（北東から）

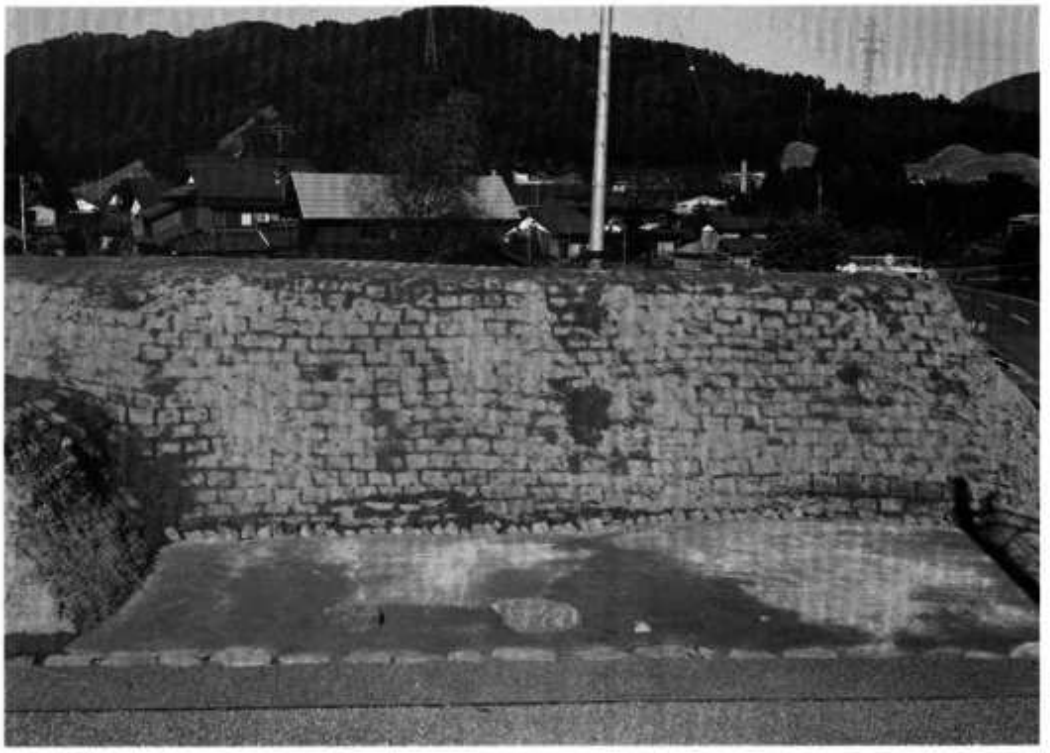
城戸口東面石垣（東から）



城戸口南面石垣（南から）

城戸口東面石垣（東から）

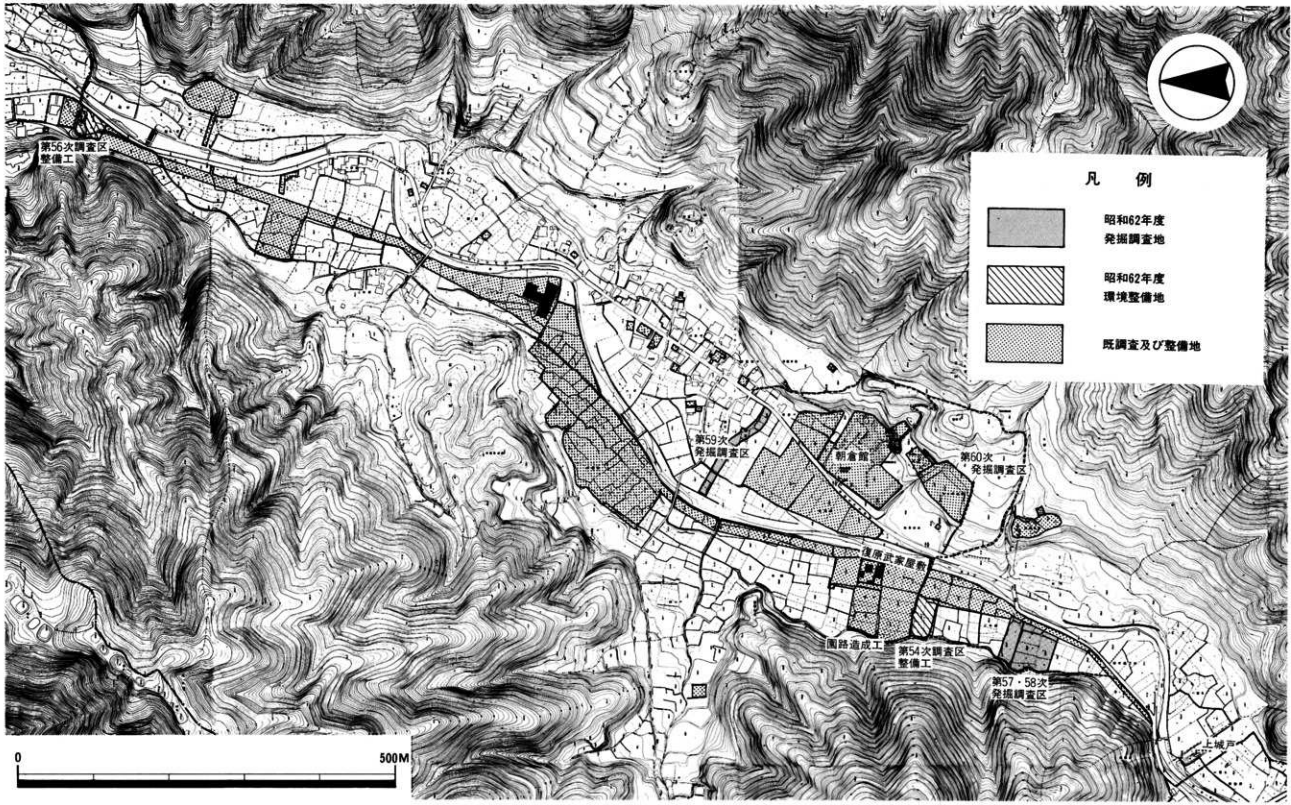
城戸口北面石垣
（北から）



土塁裾建物（南から）

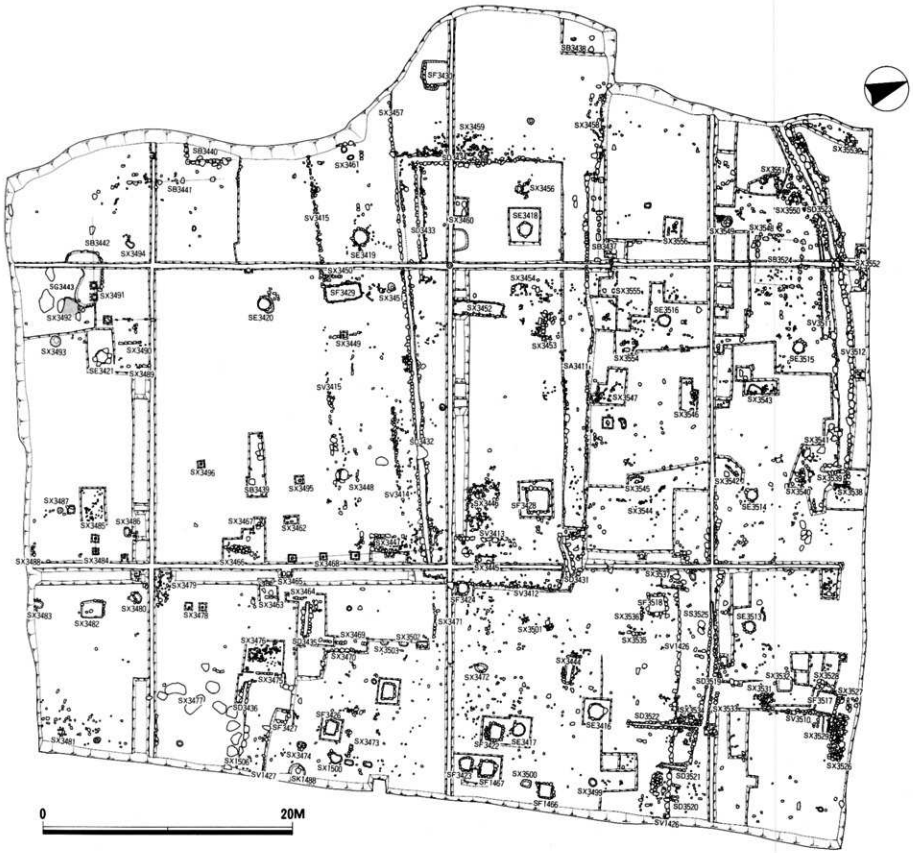
園　路

第1図　　発掘調査・環境整備位置図

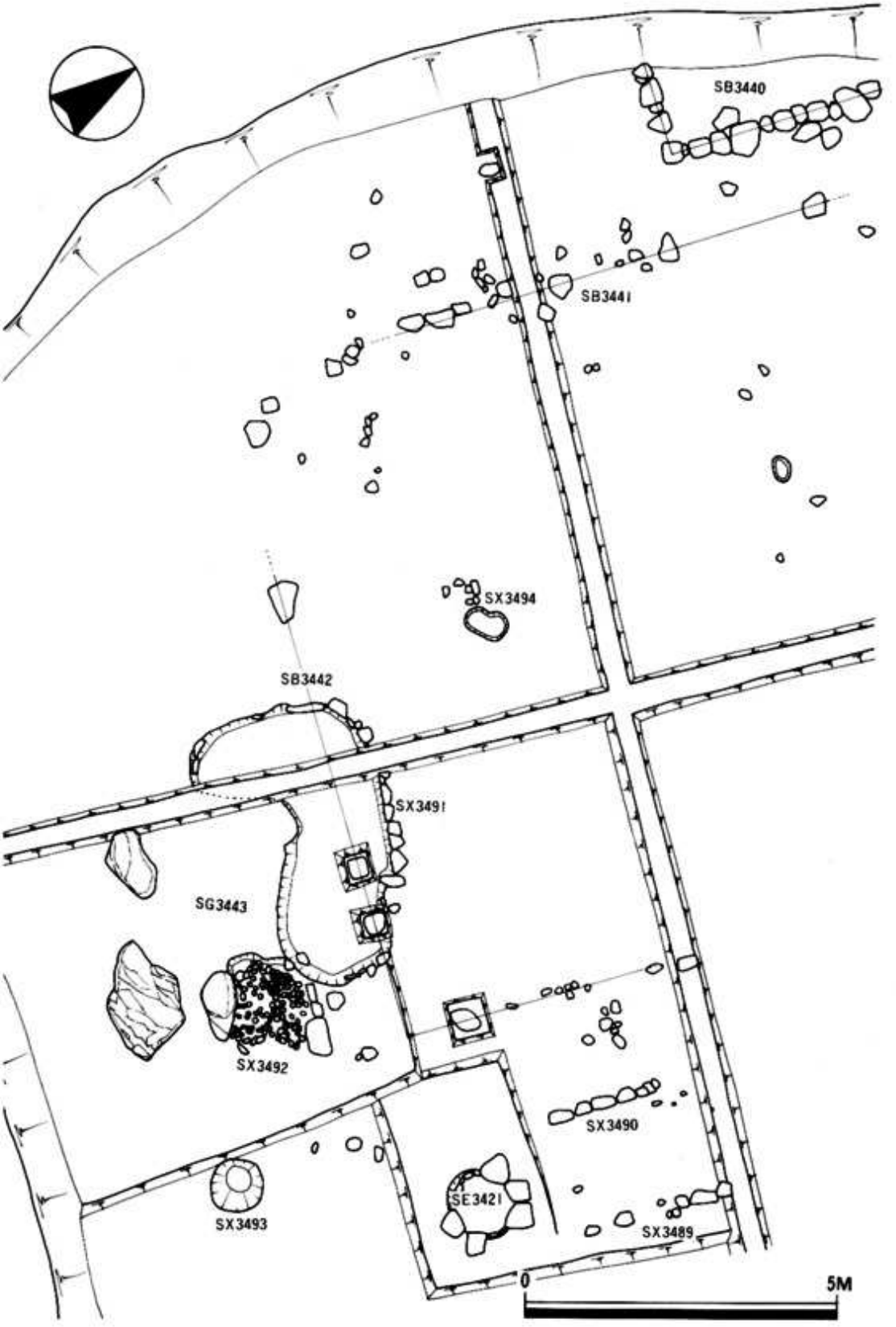


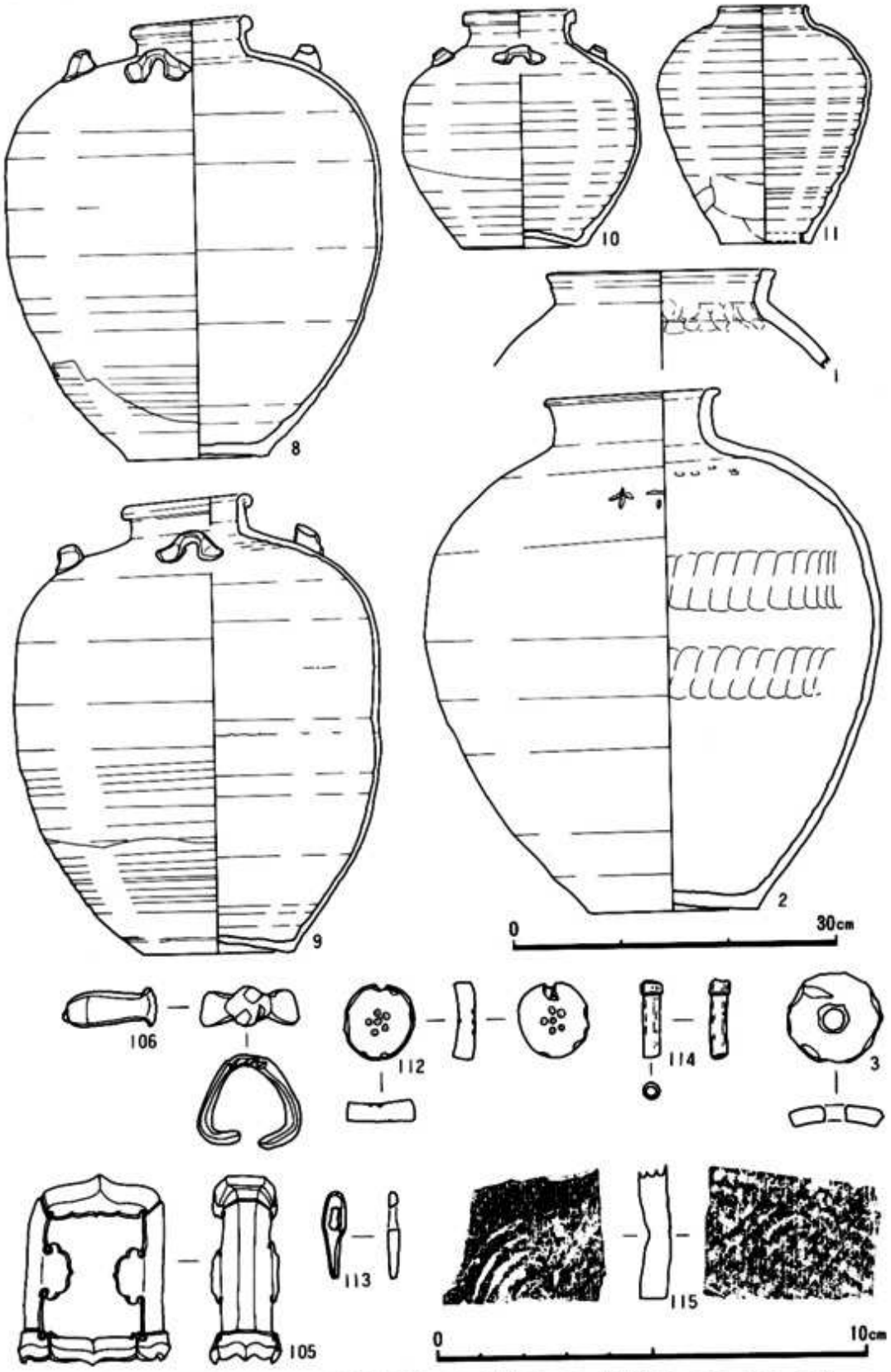
第２図

第57・58次調査遺構全測図



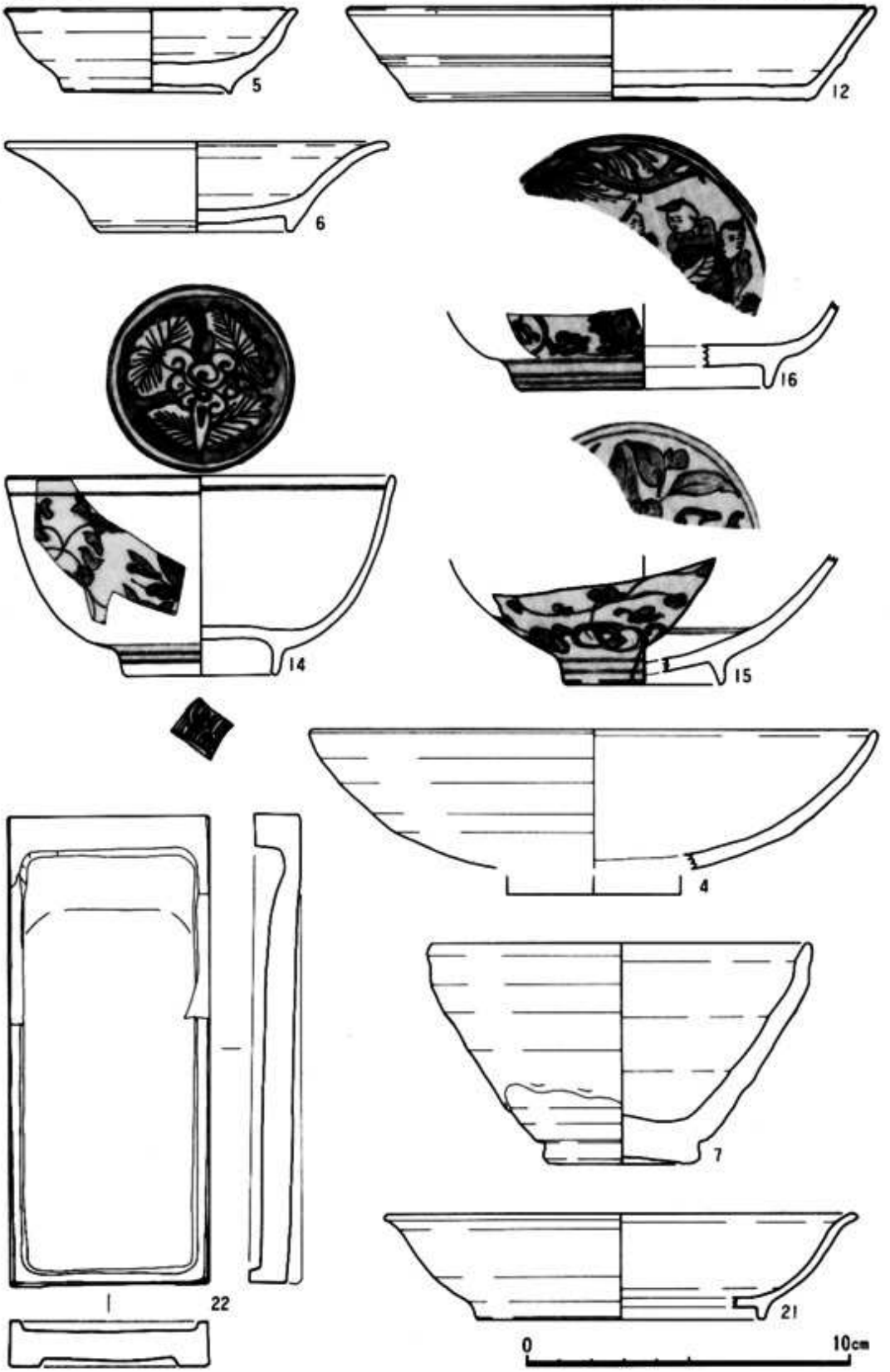
第３図　　第57次調査遺構



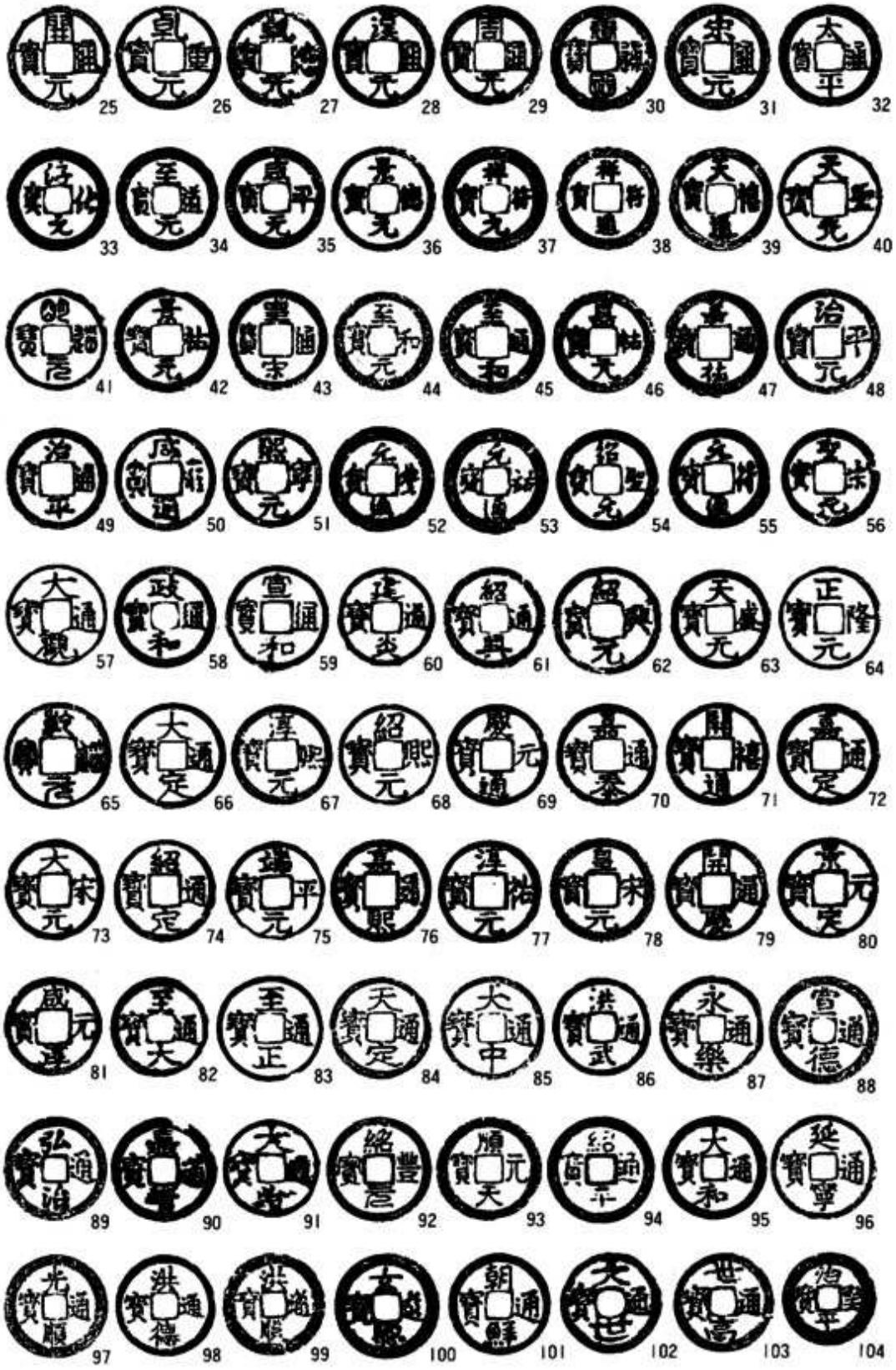


1　越前甕、2　越前壺、8～10　褐釉四耳壺、11　褐釉壺、3　灯芯押え、105・106　青金、112　駒石、113・114　骨加工品、115　須恵器片

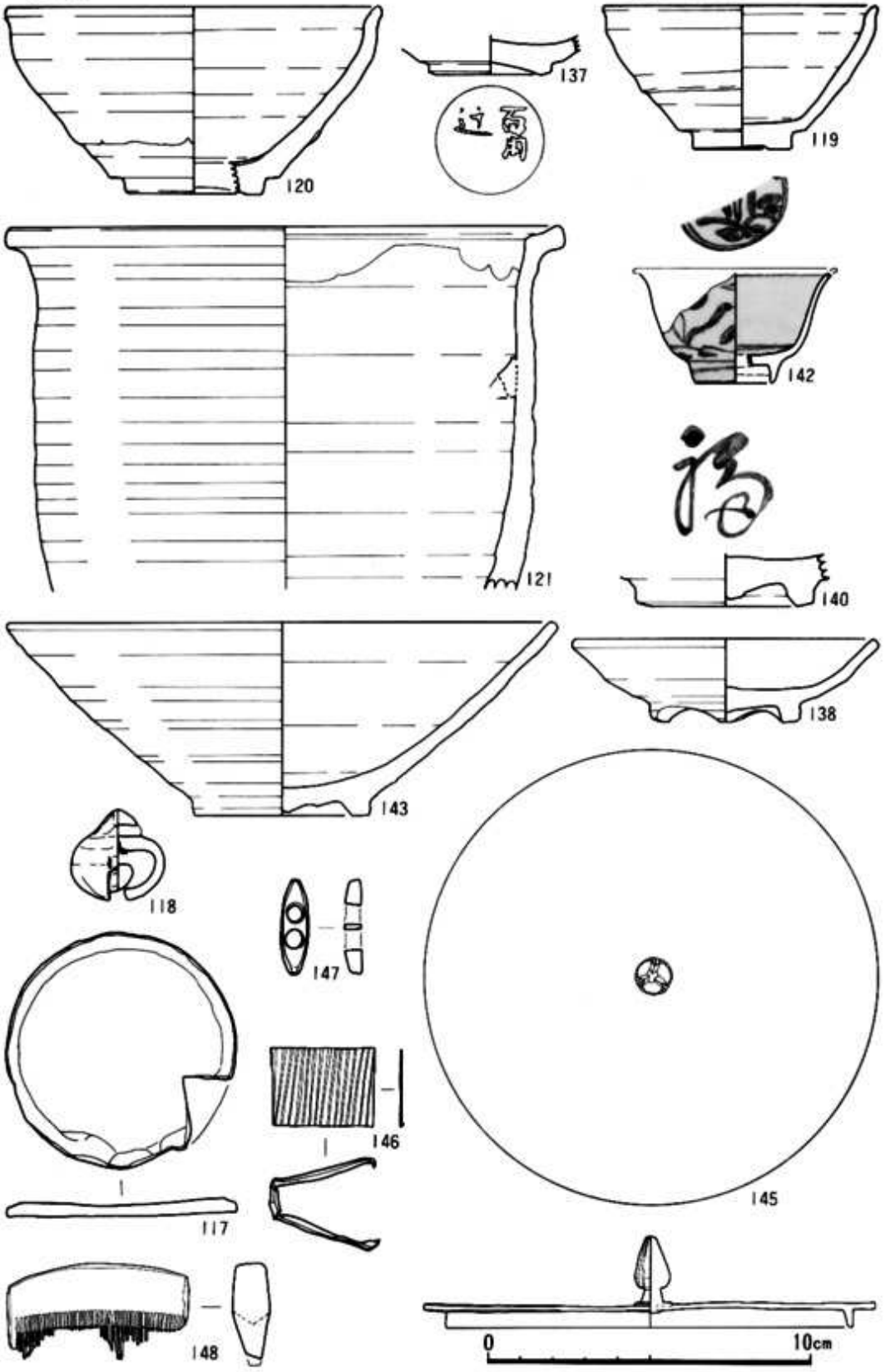
第5図　　第57次調査・遺物 (2)



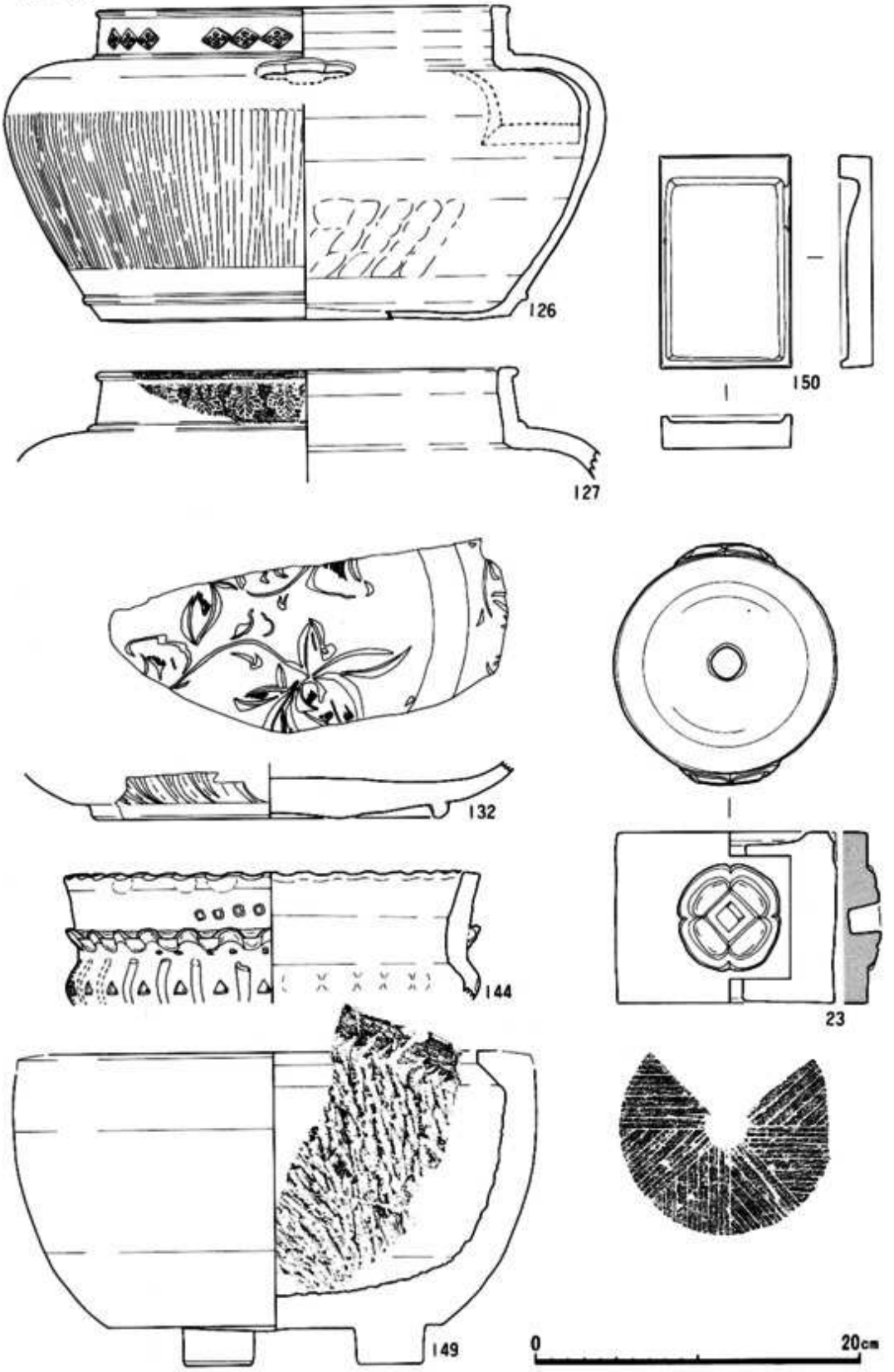
4　鉄釉碗、5　灰釉皿、6・12　白磁皿、14・15　染付碗、16　染付皿、7　黒釉碗、
21　交趾皿、22　石硯



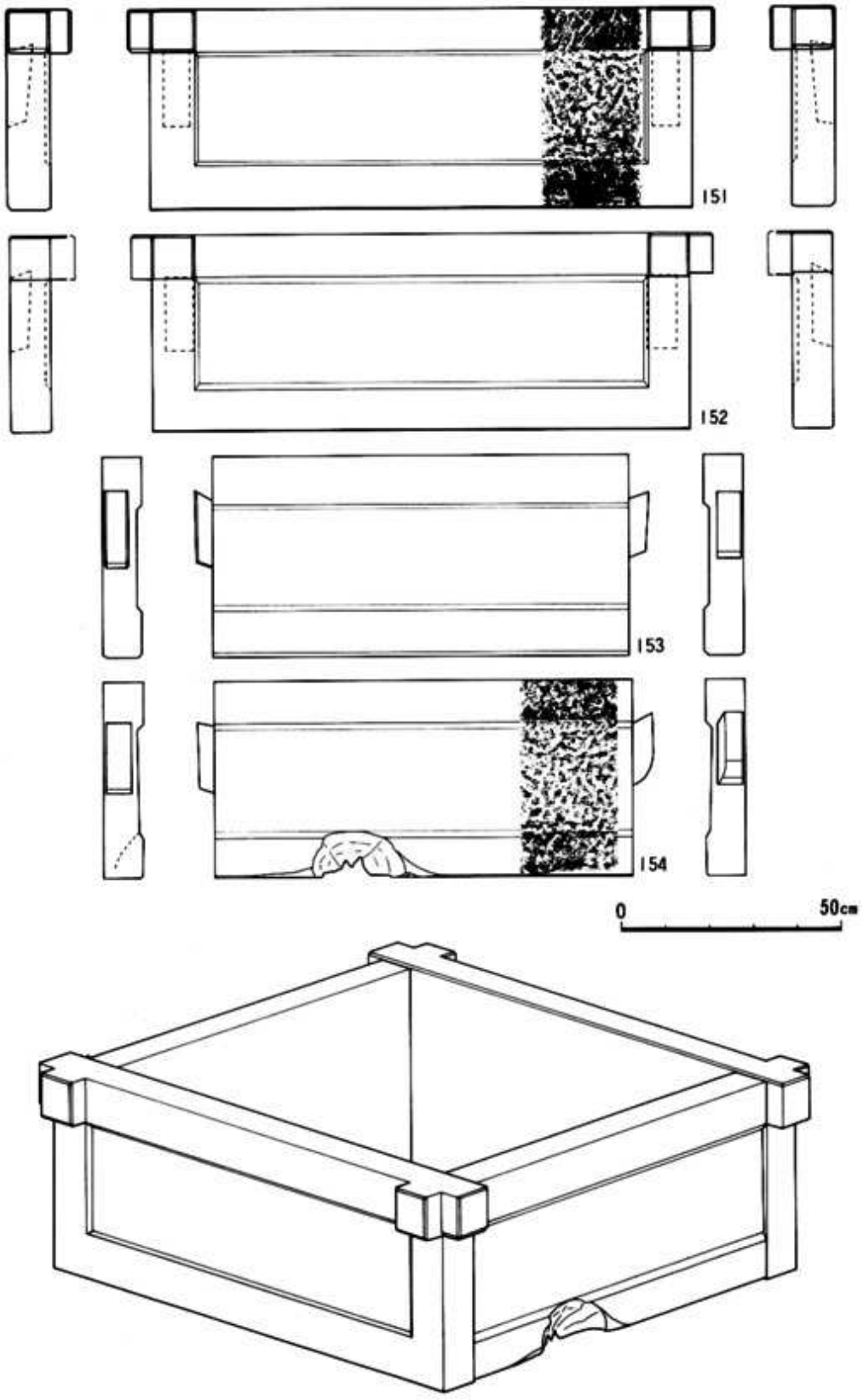
SE3419出土渡来銭（縮尺2/3）　　※104「治平聖宝」は産地、鋳造年等不明



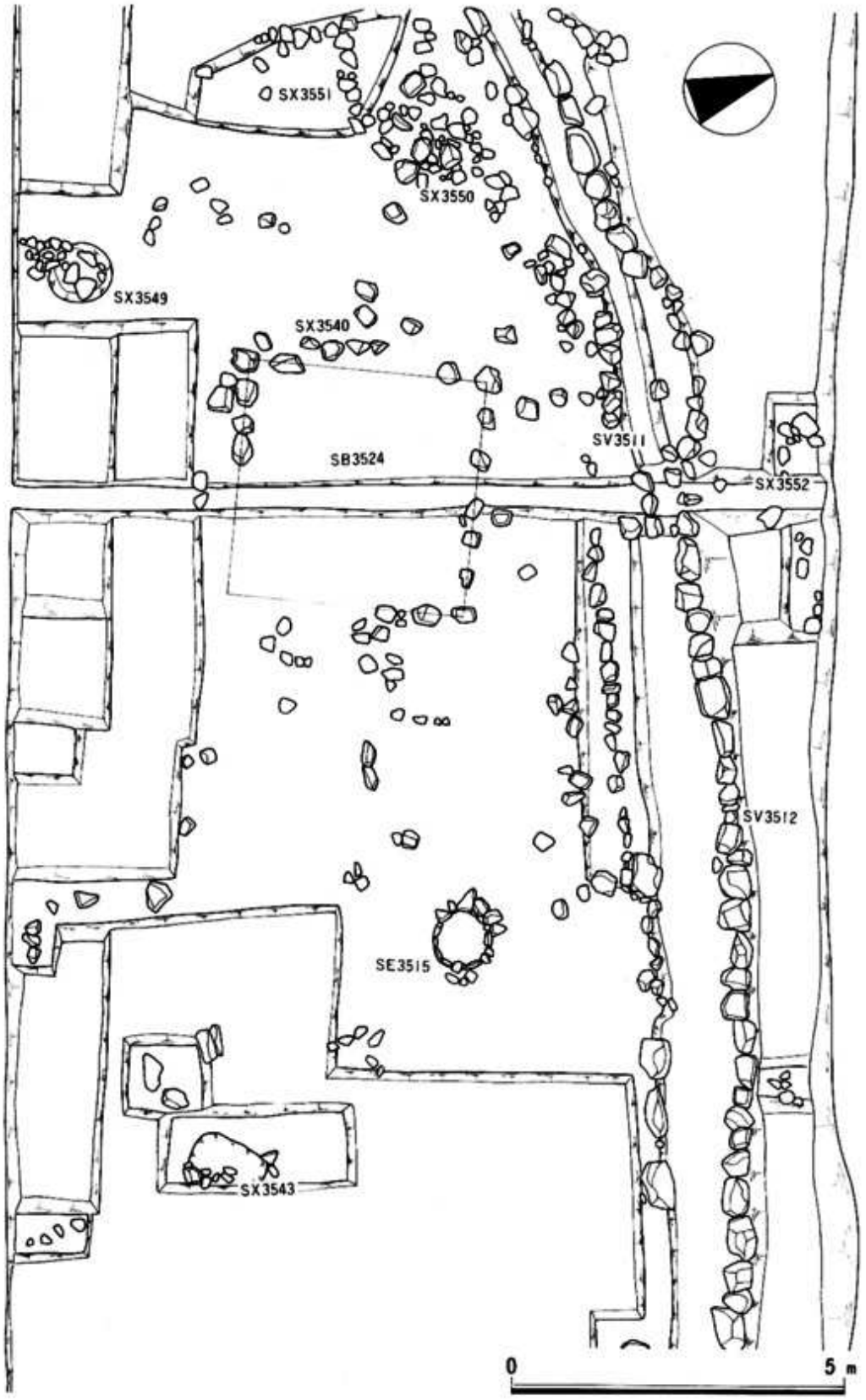
117　土師質円盤、118　土鈴、119・120　鉄釉碗、121　鉄釉匣鉢、137・138　白磁皿、140　染付碗、142　染付坏、143　ソバ茶碗、145　蓋、146　板状金具、147　鞴、148　櫛



126・127　瓦質風炉、132　青磁盤、144　不明陶器、23　茶臼、149　石製風炉、150　石硯

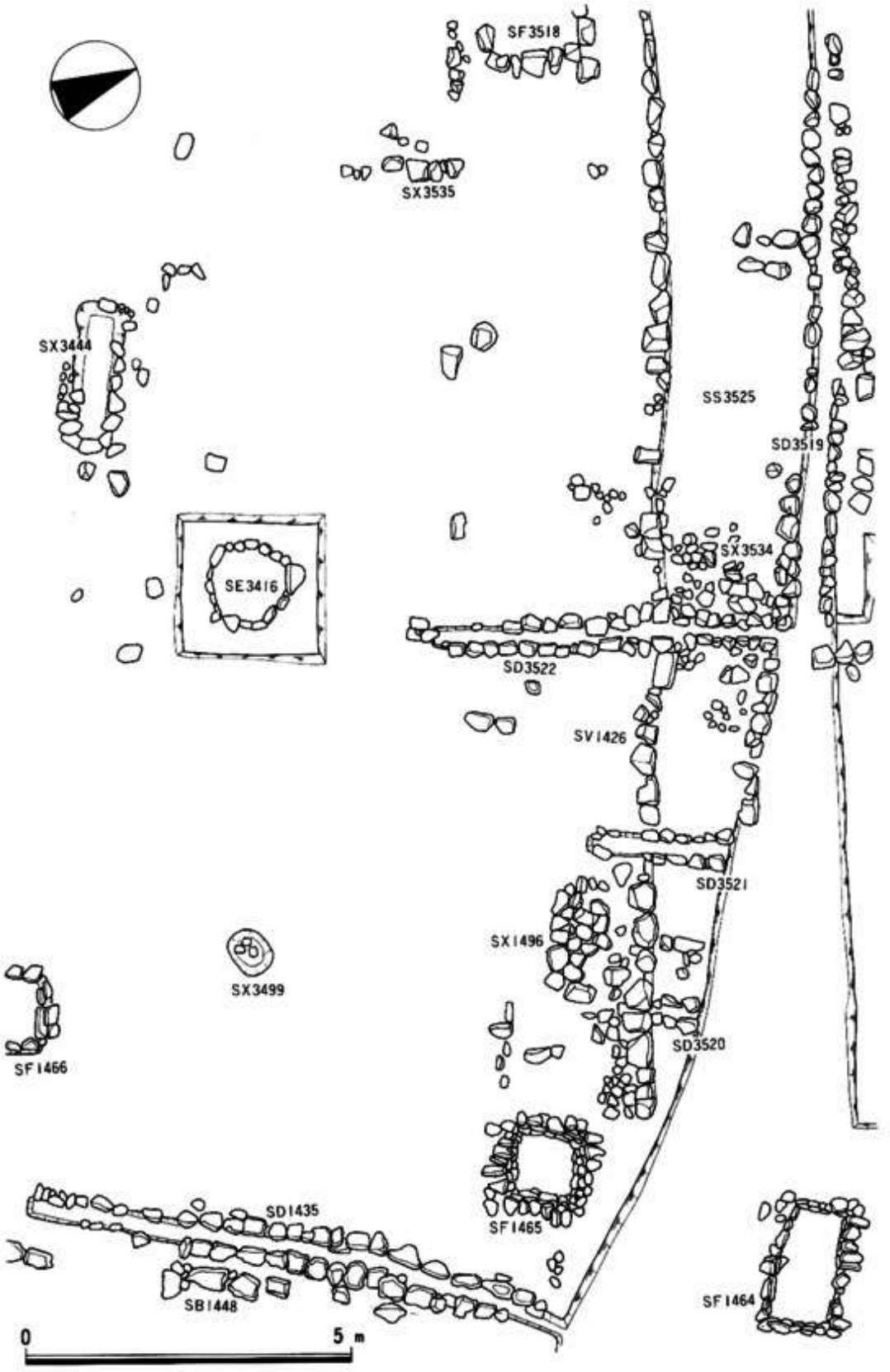


ＳＥ3416出土井戸枠および復原図

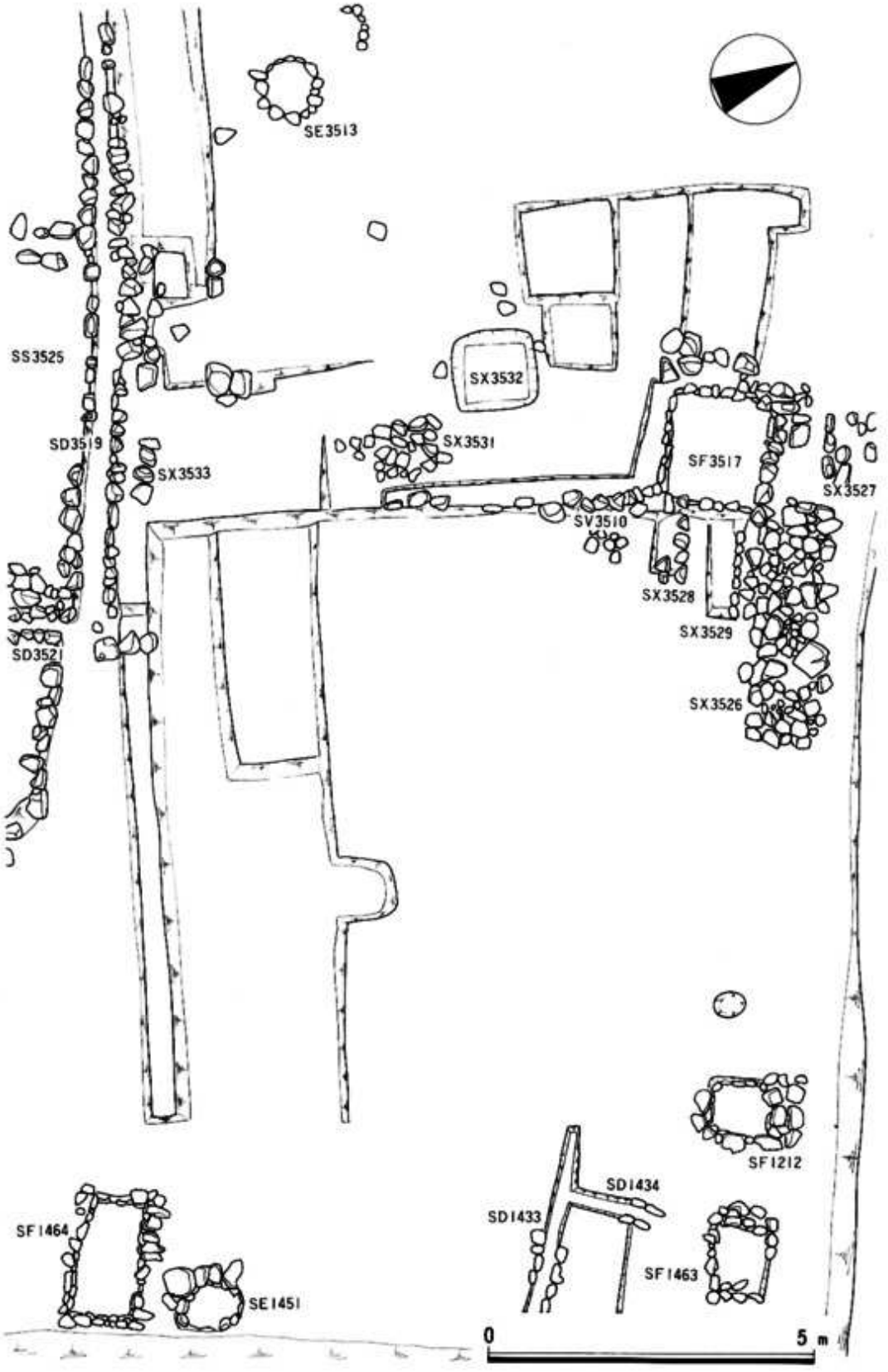

SX3551
SX3550
SX3549
SX3540
SB3524
SV3511
SX3552
SV3512
SE3515
SX3543
0
5 m

第11図

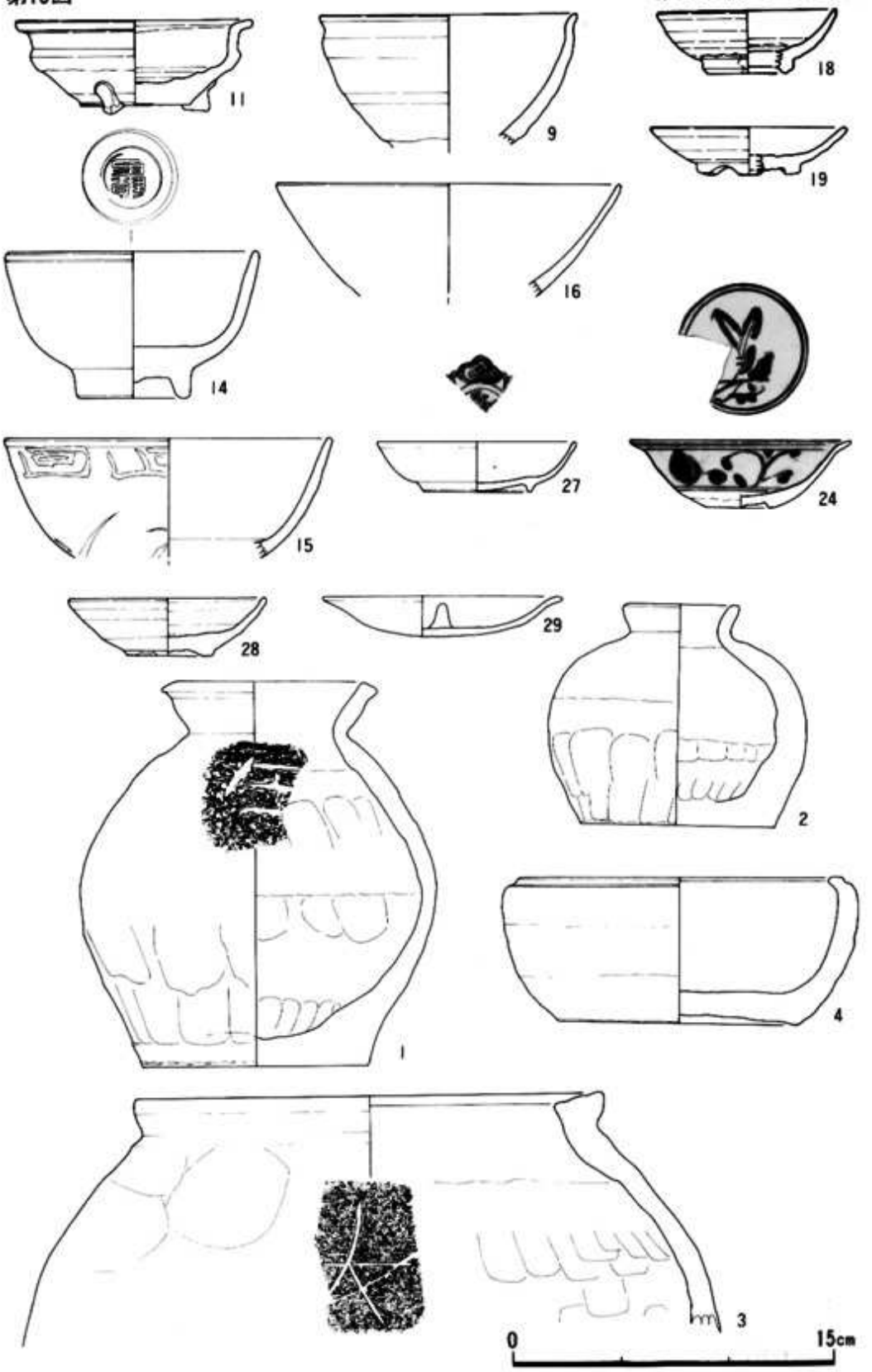
第58次調査・遺構 (2)



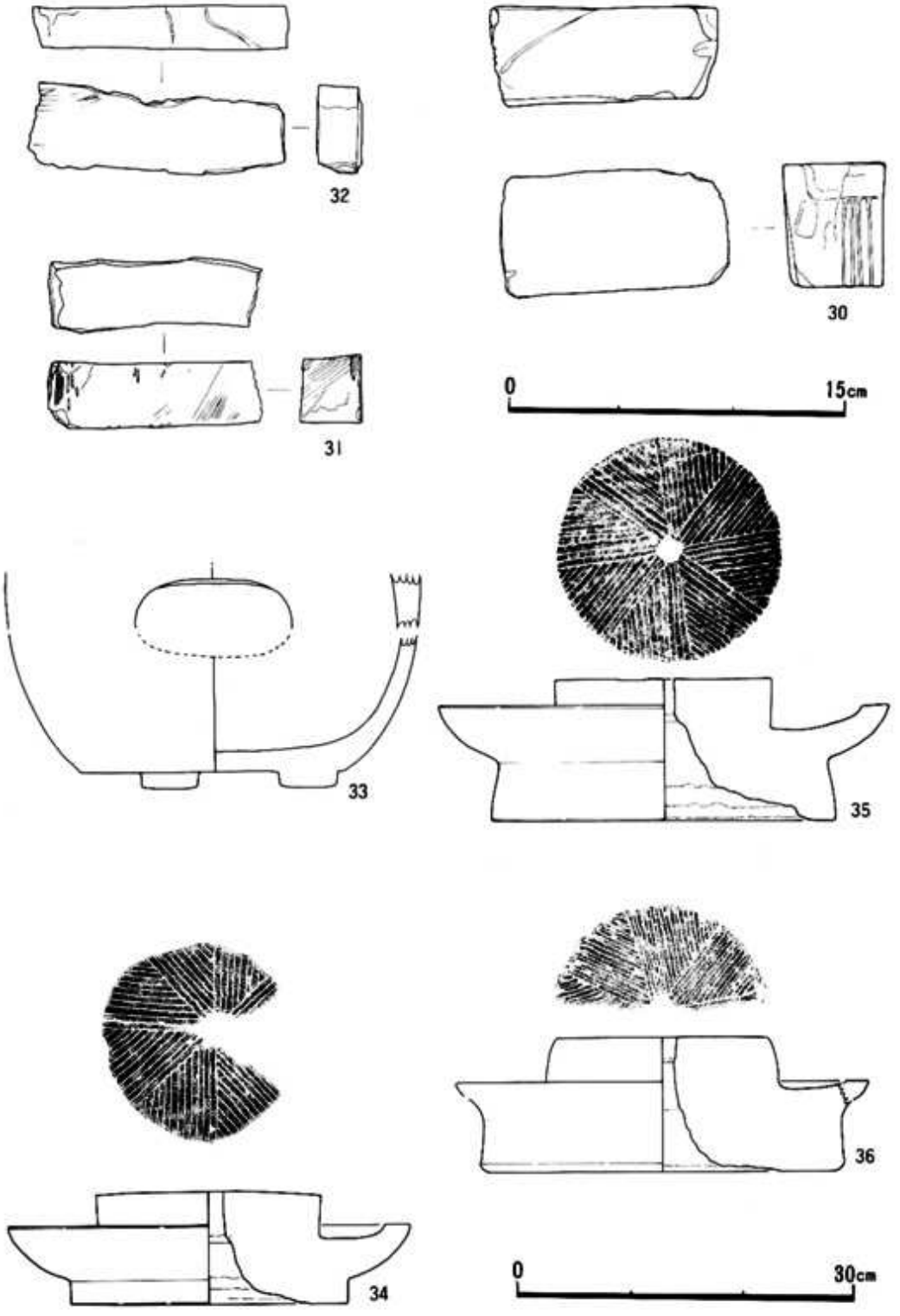
第12図　　第58次調査・遺構 (3)



第13図　　第58次調査・遺物 (1)



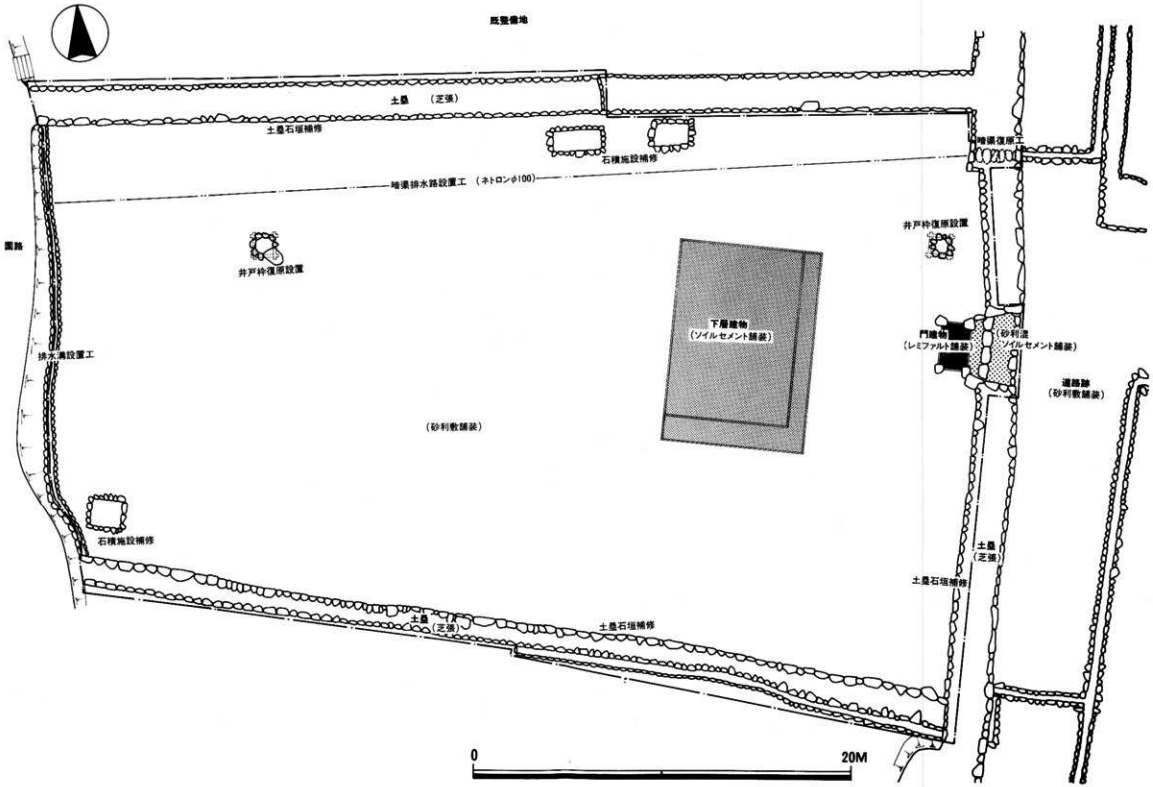
1～3　越前焼壺、4　越前焼鉢、9　天目茶碗、11　鉄釉香炉、14～16　青磁碗、18・19　白磁皿
24・27　染付皿、28　朝鮮製杯、29　銅製燭台



30～32　砥石、33　笏谷石製風炉、34～36　茶臼

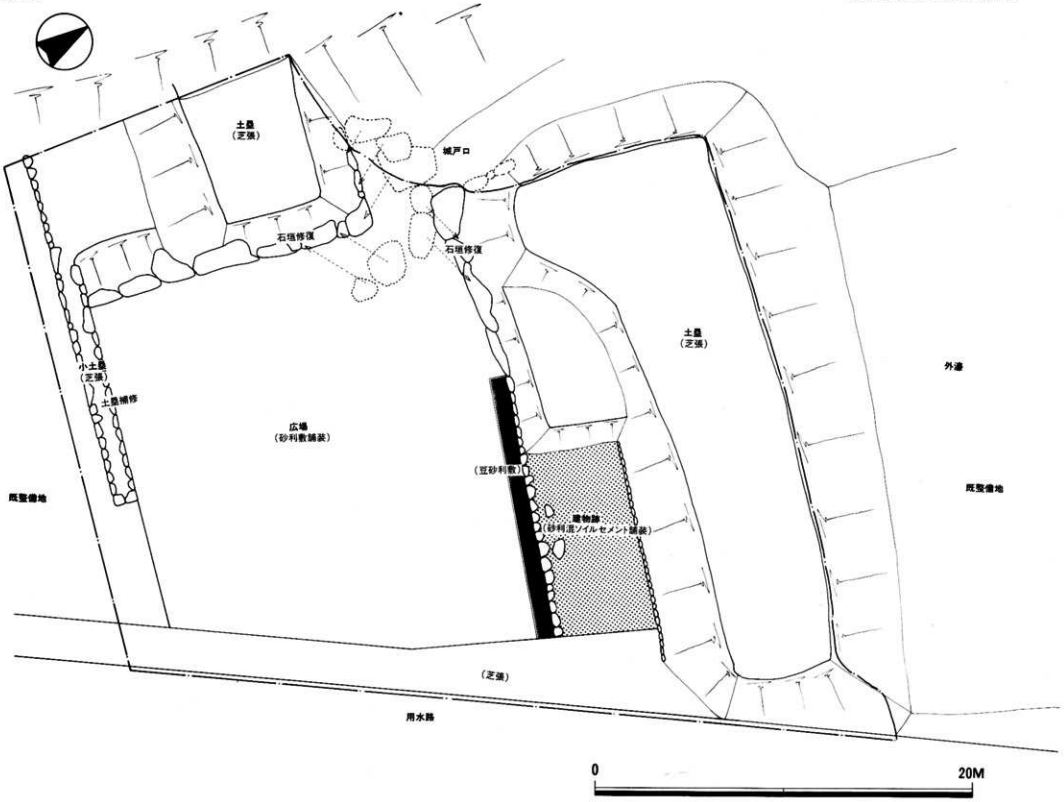
第15図

第54次調査地区整備工全体図



第16図

第56次調査地区整備工全体図



特別史跡　一乗谷朝倉氏遺跡　XIX

— 昭和62年度発掘調査整備事業概報 —

昭和63年３月31日

編集発行　福井県立朝倉氏遺跡資料館©

印　　刷　河和田屋印刷株式会社

無断転載を禁ず